
私立不問不語学園中等部、36人の変人、奇人、怪人達

踏鞴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立不問不語学園中等部、36人の変人、奇人、怪人達

【Nコード】

N3270Q

【作者名】

踏鞴

【あらすじ】

とある田舎町の広大な土地を使った不問不語学園。そこでは奇妙な生徒達が集まるといふ私立不問不語学園三十六奇人会と言うものが存在した。そこで行われる活動は奇妙なことばかり。奇人会に入会したばかりの逆夢蹴人はどうなる！？

私立不問不語学園の件

私立不問不語学園しりつとわすかたらがくえんはとある田舎町の周りになにも無いところに存在した。

その学園内は兎にも角にも広い。とても広い。

初等部から高等部まであるのだから確かにそれ相応の広さは必要となってくるのだが、それに付けてもこれは別格である。ワンピースで言うところの巨人族というなんとも驚きな生命体が軽く30は住まえてしまう。

……少々分かり辛かったか？ まあそれだけ広いということだ。

まあこの不問不語学園と言うなんとも奇妙奇天烈奇奇怪怪な公共施設を紹介するに当たっては、ここら辺の当たり障りの無いところから始めるのが妥当なのだろう。

いや、失敬。今は言葉の綾であり、施設自体は全く以て正常だ。凡庸だ。広さ以外は。

寧ろ、15年前に出来た学園と言うこともあり、内装はかなり立派な部類に入るだろう。設備もかなり新しい。

問題は人間。それもある一部の人間。

ある一部の奇怪な人間。

ここから先は私の都合上中等部しか紹介できないが、このようなことが初等部と高等部でも行われていると思って欲しい。

それでもやはり中等部は例外的におかしな奴ばかりなのだが。

私がこれから語りだす人間はどうしようもなく

変で、

妙で、

異常で、

奇怪で、

特異で、

怪しくて、

不自然で、

社会不適應で、

そしてどうしようもなく楽しい奴らなのだ。

しかしそれは私一人から見た視点なので一概にどうとは言えない。寧ろ、気分を害する方々の方が多いのかも知れない。そういう方々にはまず私から先に謝罪をしておこう。

申し訳ない。

だがしかし彼らは決してふざけているわけではない。まあ、たまに、というか時々、いや週四で？ 五、六？ ふざけるときもあつたり無かつたりやつぱりあつたりなのだが、基本的には彼らは真面目に一生懸命生きているのだ。それは認めてやってほしい。

君がそう彼らのことを少しでも理解したつもりになり、彼らのことを少しでも好いてくれるのなれば、これほど嬉しくて、喜ばしいことは無い。

そんな不問不語学園中等部の36人の奇人達を、彼ら、或いは自らが敬意や畏怖の意味を込めてこう呼んでいる。

『不問不語学園中等部、三十六奇人会』

……そのまんまだが。

それでさえ全く以て愛おしい彼らの物語をどうか読んでやってくれ。

逆夢蹴人の件（前書き）

件は『けん』ではなく、『くだり』と読んでください。

逆夢蹴人の件

不問不語学園の特徴として何か一つ、数々ある特徴の中でも一つを特筆して挙げるとするならば、それは他の学校その他の社会的機関の中において、圧倒的に自由だということだろう。

いや、それでは正確ではないかも知れない。正確に言えば、緩いのだ。すべてにおいて規制と言うものが有るようでない。それが不問不語学園の特徴である。

ここで場所を不問不語学園の中へと移動しよう。

学園内。正門から約100mほど進んだところにある、不問不語学園中等部。そこは15年前に建設されたということもあり、比較的、と言うかとても新しく、全校生徒の人数が多めのため、普通の中学よりやや大きく設計されている。

自然、職員室も広くなってくる。

さて、その職員室だが今、つまり放課後になったばかりの午後4時ごろ、本来ならば職員の殆どはその職員室で何かしらの作業をし、広い職員室も多少は人で狭く感じてしまう時間帯なのだが、今日に限ってはこういう訳か人がいない。

いや、人がいないわけではない。

正確に言うと、人が隅に“寄って”しまっただけで中央部が広く感じられるだけだ。

では職員を寄らせてしまっている原因は何か。

ただの中学一年生である。

ただし、頭に目だし帽をかぶり、両手に火のついた花火を持ってはいるが。

季節はずれですね。とか言ってる場合では勿論ない。

傍から見れば、いや、本人から見ても完全に犯罪である。

テロ行為と言っても過言ではないのかもしれない。

ここが学校で、不問不語学園でなければ確実に警察に電話が掛かっていただろう。

無論、いくらこの学園の特徴が自由だからといっても、こんなテロ行為を見逃せるほど教師達も人格者ではない。

「こらああああ！ さかゆめ 逆夢え！ 何してるんだ！」

程なくして、教員の中の一人、比較的その中学生の近くにいた若い男性の教員がその中学生に声をかける。

すると、右手の花火を左手にもち、あいた右手である教員の机を漁っていたその中学生は、ぎょっとした顔になる。

それは目だし帽を被っていてもはつきりと分かるほどだった。

「ええええ！？ なんで分かったの！？」

「まず、背格好で大体の予想はつくし、そもそもてめえそれさっき俺が取り上げたお前の携帯電話だろうが！」

その教員が中学生が今、教員の机から取り出した携帯電話を指差しながら叫ぶ。

どうやら授業中に取られた携帯電話を取り返しに来たようだった。

どうやらこの少年、頭の方がかなり残念なようだ。

「ばれちゃあ仕方がない。……逃げ！」

「逃がすかああああ！」

目だし帽を投げ捨て、一目散に職員室の外へと走り出す少年。と、それを追いかける中学教諭。傍から見たらかなり滑稽な状態だ。

残された教員達は呆けた顔をしていた。

「まてやあああああ！ てめえこれで騒ぎ起こすの何回目だ！」

「えええ！？ まだ中等部来たばかりなんだから言われるほどじゃねえだろ！ 3回だけだよ！」

「3回“も”だ！」

「それは見解の相違と言う奴だね！」

「黙れ！」

もう放課後で人もまばらな校舎を二人は走っている。

そう言いながらもこの少年と教員の距離がどんどん縮まってゆく。この少年の13歳にしてはそれなりに脚力に自信のあるほうだったのだが、いかせんまだ中学生である。大人、それも二十代の若い人相手では捕まるのも仕方のないことだ。

距離が更に縮まり、あと5mほどで少年の肩に教員の手が届いてしまうという時、突然その声は響いた。

「しゅーくん！」

その声はすぐ手前の曲がり角から聞こえたように教員には思えた。しかしそんなことは関係なく、少年も教員も走り続ける。やがて、と言うほどの時間もたっていないのだが、少年はその声がした曲がり角を曲がる。教員も後に続く。

教員はここでそろそろ決着をつけようと考えていた。しかし自分が角を曲がった途端少年が自分とは逆方向に飛び出してくることも考えられたので（逃げるのが上手い奴が時々使う手だ。この教員も何度かやられている）その曲がり角は慎重に、しかしスピードは維持しつつ曲がる。

が、

目の前には信じられない光景があった。

少年が居なかったのだ。

無論、この廊下に隠れる場所などないし、あったとしても少年が

曲がってから教員が曲がるまで1秒あったかないか程度の時間だ。それでは隠れようにも隠れることなど出来ない。

それにあの声のこともある。

教員は不思議に思い、しかし諦めきれずその場を暫く搜索した。結果は書いておく必要は無いだろう。

「どうなつてやがるんだ……？」

その問いに答える者はどこにもいない。

屋上での件

「いやー助かったぜ、むー」

ここは屋上。私立不問不語学園の屋上だ。そこに二人の少年と少女が手をつないだまま大の字に寝転がっていた。

この不問不語学園の屋上は基本的には解放されている。しかしこの中等部の第一棟だけは昔何かの影響でフェンスが壊れていて危険な為、鍵が掛かったままだ。

そのため、ここに入ることが出来る人間は少ない。例えば合鍵を持っている人間、例えばピッキングが出来る人間、例えばすぐ下の三階からよじ登ってくる事が出来る人間、

「うん。しゅーくんの叫んでる声が聞こえたからまた何かやったのかなって」

「いやあ本当にむーの瞬間移動は役に立つな」

例えば障害物も関係なく、意のままに思った所へ瞬間的に移動できる人間。

この蹴人の横に寝転がっている少女はこれに該当する。

「でもしゅーくん、今度は何したの？」

「ああ、授業中にケータイいじってたら取られた。で、取り返した」「そんな短絡的な……」

少女は深くため息をついて呆れた顔になる。しかし、すぐにそれを笑顔に持ち直すと隣の少年、蹴人に向かって呼びかけるようには

なす。

「大丈夫だよ。逃げる時は無辜が手伝ってあげるから」

さすがに「奪い返す時」までとは言わない。

「むー……」

蹴人は目に涙を浮べるとすぐ隣に寝ている少女に抱きついた。

「ありがとうっ！」

「わひゃひゃひゃっ！ えっ、いやっ、そのっ、わかったからちよつと一回……」

「放すの？」

「えっ、いやっその……別にこのままでも良いと言うか……寧ろこのままの方が……」

少女の顔は耳まで赤くなっている。

その時、校内放送を告げる無粋な音が二人の耳に聞こえた。

『えー、1年6組逆夢蹴人1年6組逆夢蹴人。今すぐ携帯もって職員室に投降しやがれ』

「……………」

「……大丈夫だよ。……逃げる時は無辜が手伝ってあげるから……」

その声は先ほどと同じ言葉の筈なのに全く頼りなかった。

その時だった。

開かないはずの屋上から階段に続く扉が開かれたのは。

二人、飛ぶように離れ、立つ。

蹴人は教員の誰かがこの場所を嗅ぎ付け、蹴人を捕まえに来たのではと危惧していたがどうやらそうではないようだ。

そこにいたのはどう見ても中学生だった。

学年は蹴人よりは上か。そいつは男で、それならば学ランの襟についている校章のカラーで学年が分かる筈なのだがこの少年にはそれがなかった。

というか学ランを着ていなかった。

ジャージだ。それも学校指定ではなく、もっと高そうなブランド物。

そのジャージをだらしなく着こなしたその少年は蹴人達の方を見るとけだるそうに呟いた。恐らくは独り言のつもりなのだろう。

「あ、やっぱ永久さんの言ってた事のほうが正しいじゃねえか。んだよ人形め、適当なこと言いやがって」

その声は全て蹴人の耳には聞こえていた。しかし、その言葉の半分も理解が出来なかった。

蹴人がどう対応しようか迷っていると、驚くべきことにさきに動いたのは蹴人の隣に座っている少女だった。

「あれ？ 自由さん、どうかしたんですか？ こんな所で。というかどうやって開けたんですか？ 扉」

どうやらこの少女はこの少年のことを知っているらしい。ただそれだけのことなのだがこの少女のことを何でも知っているとって

いた蹴人からすれば自分の知らない人間をこの少女が知っていると
言うだけで相当シヨックを受けたのだった。

それも相手が男だったのでシヨックはよりいっそう強かった。

「あ、俺、ピッキングできるからな」

「そうでしたね、そういえば。じゃあなんでここにいますか」

「あれだよ。今年もこの季節になりましたドンドンパフパフ新入生
勧誘大会」

「でもそれはしゅーくんの居ないところでやってくれた方が……」

どんどん話が分からなくなってくる。しかも自分はお呼びでない
らしい。蹴人は最上級に面白くなかった。

「大会である必要性は全くないだろつ、つていう突っ込みを期待し
てただけだねー。まあ最速ちゃんに求めるのも酷な話しか。でも
今、ここにいることに意味があるんだ。最速ちゃんの愛しのしゅー
くんも三十六会の入会が決まったよ」

「えっ!？」

「??」

今の話は自分に関係がありそうだ。蹴人はそう思ったが、しかし
今だ何を言ってるかさっぱり分からなかった。

「なああんた、なんださつきから。何の話をしているんだ?」

なので聞いてみる。蹴人は考えることが好きでは無い。

「うん。まずはこれを受け取ってくれ」

差し出された封筒を素直に受けとる蹴人。中を見てみると、可愛

らしいキャラクターが書いてある便箋に手書きでこれまた可愛らしく恐らくは女性が書いたのであろう手書きで大きく文字が書いてあった。

『1年6組9番 逆夢蹴人くんへ

えーまず最初に祝福を。

おめでとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！
君はこの手紙を受け取ったその瞬間から【私立不問不語学園三十
六奇人会】の一員だ。

その持てる力の全てを使って僕達を守ってくれたまえ。無論、僕達も君を死力を尽くして君を守ると誓おう。

これから、出来る限り早く僕達の拠点に来て欲しいのだが今暇かい？ たとえ忙しかったとしてもすぐ来ることを勧めるよ。なんせ楽しいからね

まあ拠点の場所とか詳しいことは目の前に居るジャージ男に聞いてみてくれ

尚、この手紙は読了と同時に消滅する

Mより』

「……」

無論、いくら待っても消滅する気配はない。

「えーと、これ、なに？」

蹴人はとりあえず一番最初に思いついた感想を聞いてみた。

「あ、読み終わった？」

しかし目の前のその少年は蹴人の言ったことを完全に無視し、手

元からライターを取り出した。そして蹴人が何も言う暇を与えぬままその手紙を燃やす。

「うおおおお！ 何しやがんだ！ 危うく僕の指まで燃えるところだっただろうが！」

「だから書いてあるだろ？ 読了と同時に消滅するって」

「自分で燃やしてんじゃねえか！」

「そんなの些細な違いだね。さあいこうか」

「どこにだよ」

「ん？ お前、読んでないのか？ 俺たちの言うところの本拠地だよ」

そのジャージの少年はこれで話は終わりだといわんばかりに歩き出した。

「誰がいくかそんな怪しいところ」

「えー、でもこの子も行くぜ？ それでも来ないのか？」

隣の少女を指差すジャージの少年。

「おいむー、いくな」

「えっ……でも……」

「ちよつとちよつと無理強いはいけないなあ。亭主関白？ なんでもいいけど。なにさ何が不満なの？」

「ぜんぶだよ。まずこれなんだ。何するところだ。何で僕を誘ったそしてなんでむーとお前が知り合ってるんだ」

「はあああ、面倒だなあ君は。ホントに、自由度が下がるよ。いいや、歩きながら説明するからついてきてよ」

そう言っただけで今度こそ歩きだす。それでも蹴人はこの人物について

いくか迷っていた。というかこの男が気に食わないのでこいつの言うことを聞くのが癪だったただけなのだが。

「しゅーくん、大丈夫だから。付いていこう」

そんな蹴人を見かねたのか隣から少女が声をかけてくる。蹴人も仕方なく付いて行くことにする。

「うちってさあ、体制とか校風的にいろんな人間が集まりやすいじゃん？」

ジャージの少年がそんな風に話し出したのはピッキングで鍵を閉めている最中のことだった。

「まあそれでも良い方にずれてたり、多少のズレだったら問題ないんだけど中には真っ当に社会生活を送ることさえままならない人種が結構居たりする。

この学園には特にな。

だから足りない奴は持て余してるやつから少し貰えば言い。ずれてる奴は逆の方向にずれてる奴と一緒に居て中和させてやれば良い。まあこんなの理想論でさ、実際はそんなこと出来ないしそもそもそう言う奴は自分の殻に閉じこもっていることが多いからしたくても出来ないわけだ。

で、ここでさっきの奇人会が登場する。

まあ成り立ちとか構成員とかはメンドイからはぶくけど、歴史は浅いよね。この学園も浅いし当然なんだけど。

それでその奇人会ってのは文字通り社会不適切応者、変人、奇人、怪人、狂人、まあその他色々が集まって一つのグループとして存在

してんだ。そしてその中で助け合う。と言つより分け合う。多すぎる才能や力を少なすぎる奴に分けてやるんだ。逆にその多すぎる奴は何故か絶対どこかしら抜けてるからその抜けてるところを補ってやるんだ

ほら、みんなハッピー、平和だろ？」

と、ここで三人は靴を履き替え校舎から出る。どうやら拠点というのは校内には無いようだ。

「それに君が選ばれちゃったって訳だ。理由を聞くなよ。俺は決めてないからな。怨むなら自分の日ごろの行いを怨め。

まあそれでも敢えて理由を推測するならば、力かな。

俺たち奇人会が欲してるのは力だ。体力、財力、権力、知力、まあ時々超能力？ そんなところ。で、それはバランスが大事なわけ。

今は基本的に財力、権力に偏ってるんだよ。だからつかいっぱしりとしてお前を選んだんじゃないのかっていうのが俺の推測。でもまあそれだけじゃ決めないだろうけど。本当に壊れてる奴しか入れないことにしてるらしいぜ。たとえ定員割れしても。

そしてどんなに人数が少なくなっても三十六会は三十六会らしいぜつと付いたな。ここだよ」

そこは中等部校舎のすぐ脇、第四倉庫だった。

第四倉庫での件

「何奴！」

「何奴！」

「あやしい奴め！」

「あやしい奴め！」

「ここは通すわけにはいかん！」

「そうだそうだ！」

「いや繰り返せよ」

ジャージの少年の突っ込みである。

蹴人達が第四倉庫に付いた時、真っ先に声をかけてきたのは倉庫の両脇に立っていた図体のでかい兄弟らしき人物二人だった。その二人は明らかに蹴人と少女の二人に敵意を向けて話しかけてきていた。

おかげで少女は怯え、少年の後ろに隠れてしまった。

「おいおい誰だこいつら」

蹴人の苦情である。

「ん、ああ。門番みたいなもの。ええとこっちのどちらかと言えば大きな方が兄の将棋」

ジャージの少年の紹介に対して将棋はおーす、と挨拶をする。

「で、こっちのどちらかと言えば小さい方が弟の囲碁」

こちらと同じ様に挨拶をする。

「で、こいつらは新しく入ってきた奇人会のメンバーだ。覚えろ」

「「うーす」」

「じゃあ通して」

「「おいーす」」

その兄弟同時に扉に手を掛け、第四倉庫の扉が開く。

中はとても殺風景だった。

倉庫、と言う名称のはずなのに、それらしき物は一切置いてなく
変わりに椅子やら机やら本棚やらベットやら、日常生活をする為の
物が綺麗に並べてあった。

意外と人は少なく、今現在確認できるのは倉庫の中だけだと5人
だった。

「あ、自由帰ってきたね。遅かったじゃないか。どこか寄り道でも
してたの？」

その中の一人、中央の机に上って足をばたつかせていた少年が言
う。

校章を見るに三年生のようなだ。

「人形の奴が職員室に先に行けっつてうるさかったもんだから先に行
つてたんですよ。まあ、いなかっただすけど」

「ふうん、まあいいや。とりあえずみんな出て行ってくれるかな？」

あ、君達はそのままでね」

君達とは蹴人と少女を指しているのだろう。

それ以外のメンバーはいそいそと倉庫から去っていった。無論、

ジャージの少年もだ。

後ろで扉が閉まる。

しかし倉庫にも蛍光灯が設備されていたので暗くはない。

姿勢を変えず、その少年は話し始めた。

「じゃあ改めまして。【私立不問不語学園中等部三十六奇人会】入会おめでとう。ぼくはこの審議委員長をやっている永久機関だよ。ぼくを呼ぶときは気軽に永久さんでも機関君でも永ちゃんでも何でも良いよ」

かすかに茶色がかった髪をいじりながら永久機関はいう。先程から笑顔が崩れない。

「そのことなんだが僕、これには入らないぞ」

「しゅ、しゅーくん？」

「むー、お前もだ。こんな怪しげなところにいることない。というか危なそうだし。帰ろうぜ」

蹴人が少女の手を取り扉に向かって歩き出そうとする。

そこへ永久機関が話しかけた。

「じゃあこれに入ってくれてるって言ったら職員室での一件、なかったことにしてあげるって言ったらどうする？」

蹴人の足が止まる。

「お前、何を知っている……」

先程、蹴人が騒ぎを起こしたときには職員室には生徒は居なかった。さつき放送もあつたが、それで騒ぎの場所が職員室と断定するのは難しいだろう。そもそもあの短い放送では何をしたかまでは分からないはずである。

それを“なかったことにする”といっているのだ。

「何って？ 君のことなら何でも知ってるよ。1年6組9番逆夢蹴人。初等部3年の時にこの学園に転校してきて隣の君、畦道無辜と知り合う。5、6年とクラスは違ったもののその仲の良さは健在中学生になつてクラスが同じになったことを機に正式な交際を始めた。特技は喧嘩。趣味はダーツ。苦手な物は猫でその理由は初等部5年の時に友人の飼っていた猫に手の甲を引っかかれたから。その猫は黒猫。家族は血の繋がっていない父親がひとりで……」

「分かつたもう良い」

「そお？ あとテストの結果とかも知ってるんだけど」

「もう良いんだよ。じゃああれか？ むー、じゃなくて無辜のことも知ってるのか……あの、あれ……」

「ああ、レポート能力のこと？」

蹴人が言いよんどんでいると永久機関がばっさりと言う。蹴人は今まで無辜の家族と自分ぐらいしか知らなかったと思っていたので驚いていた。

「でも大丈夫だよ、奇人会でも知ってるのは自由と六波羅審議会の連中ぐらいだ。後はみんな足が異常にはやい女の子ぐらいの説明しかしてないし」

ちなみに実際の無辜は鈍足である。

「ろくはら……？」

「気にしなくて良いよ」

「じゃあさっきの話だ。なんで僕のしたことを知っている」

「それが奇人会という存在だよ。いろんなパイプがあるのさ。で、君の返事はどう？」

「実際にやってみろ。そしたら入ってやる」

「上から目線だね。まあ良いよ」

永久機関は終始笑顔のままだった。

そして携帯電話を取り出しどこかに電話をかける。暫く話した後、電話を切り、蹴人たちに言う。

「これでもう大丈夫だよ」

「何したんだ」

「理事長に電話かけた」

「そんなんで今回のこと不問になるのか？　そもそもあんたの言うことをどうして聞く」

「だからそこは奇人会だからね。理由はそれだけ。それにぼくの学年に理事長のお孫さんがいて、奇人会に居るからね。例年よりも我々が聞くんだよ」

前半の質問には答えずに永久機関は言う。答えるまでもないということだろう。

「これで晴れて奇人会の一員だね。君には『花火』の名を与えよう」「花……？　何の話だ？」

「偽名、コードネームって奴。ここにいる奴等は特に他人に情報を与えることをよしとしない連中ばかりだからこういう偽名が必要なのさ。永久機関、最速、将棋、囲碁、自由。どれも普通の名前じゃないだろ？　因みに名前の由来はさっき君が花火を使っていたから」

命名については適当なようだ。

「そう言ってる割にはお前個人情報めちゃくちや握ってたじゃねえか」

「だからみんなを外に出したんだろ？」

そう言う問題か？

蹴人は疑問に思ったが、それを口にしても仕方ないと思ったので気にしないことにした。

「じゃあよろしくね。花火くん」

その時、まるでその声が合図だったかのように扉が開いて人が入ってきた。

声、聞こえてたんじゃねえだろうな。

蹴人はそう思ったが、あの扉は重く厚かったのでそう言うことはないだろう。

「3分経ちましたよー」

ジャージの少年、自由が言う。どうやら事前に3分で終わらせるといっていたらしい。

「まあ、せっかく新人生も来たことだし、自己紹介からはじめようか」

永久機関が声をかける。

その自己紹介から蹴人は花火とも名乗るようになった。

反対の件

三十六奇人会に入会してからの蹴人は別段なにも変わらなかった。いつものように登校して、いつものように騒ぎを起こし、いつものように無辜と昼食を食べ、そしていつものように帰っていった。強いて言うならば、騒ぎを起こしてもそれが教員によって咎められる事が異常に少なくなったということか。

そんな生活が続き、三週間が経とうとしたある日。

「やつほー。花火い。ちょっと話したいことあるから来てくれない？」

「なにしてんだよ自由先輩。今授業中だぞ」

授業中にもかかわらず堂々と教室に乱入してきたジャージの少年、名を自由と言った。無論、偽名だが。本人によると、どうやら2年生らしい。

「いいからいいから。あー、最速ちゃんもきて。花火と三人で話があるんだ」

花火は逆夢蹴人のこと、最速とはその隣の席の畦道無辜のことだ。

「今じゃなきゃいけないのか？」

「え？ 今は駄目なの？」

「……」

先ほども言ったが、現在授業中である。

「うん、大丈夫そうだね。じゃあ行こうか。センサー、ちょっと出かけてきまーす」

それに対し、教員は何も言わない。

花火と最速が強引に連れてこられたところは、花火たちが所属するクラスつまり1年6組から4クラス分ほど離れた空き教室だった。

「良いかい、今からこの教室の扉を開けるけど中にいる奴の言うことは基本的にスルーしろ。じゃないと身が持たないぞ。特に最速ちゃんは」

自由が神妙な面持ちでそんなことを言うもんだから、花火と最速も黙って頷いた。

それを確認した後、さっきの神妙さは一体どこに行ったのか、とても軽く「やつほー」なんていいながら自由はその空き教室の扉を開けた。

「遅いよ。この僕を待たせるなんて極刑ものだよ」

中には一人の人間。

綺麗な男子だった。

男に向かって綺麗と言うのは間違ってる気がしなくてもないが、この少年にはその言葉がぴったりと当てはまる。

恐らくは染めたのであろう金髪は男子にしては長めで、その髪をいま手鏡で確認しながら手櫛で整えている。その光景はただの日常動作の筈なのに、どこぞの彫刻か絵画かと見まがうほどに美しかった。

学ランの校章を見るに2年生だった。

「ん、君は……」

その少年は最速の姿を確認するや否や、最速の元に走っていった片膝を付き仰々しく頭を下げた。

それはあまりにも速く、そう言うことに馴れている花火さえ目が追いつけないほどだった。最速は驚いて声も出ない。

そして少年は最速の片手を取りながら気障ったらしく喋り始める。

「可愛らしいお嬢さん。この僕と【ピー】してくれませんか」

自主規制。

「……っつー！」

「何言ってんだおまえはああああー！」

花火の蹴りが思いつきり少年の腹に炸裂する。少年はこらえ切れずに吹っ飛ぶが、すぐに立ち上がり花火に文句を言う。

「君こそ何するんだ。僕の美しい体に傷でも付いたらどうしてくれる。というか男は触るな」

「今のは蹴られてもしようがないね！ 初対面の人間にそんなこと言う方がおかしいわ！」

「黙れ、下衆が。不細工がうつる」

「んだとこらああああー！」

「まあまあ、花火も反対も落ち着いて。と言うかお前初対面の人間をいきなり口説くなっっていつつも言ってるだろ」

仲裁に入るのは自由である。二人、一時的ではあるが口論をや

める。

しかし今のは明らかに口説くというレベルではないのだが。

「はあ、面倒だな。自由度が低いよ本当にもう。いいから取り合えず自己紹介からしてよ」

「花火だ」

「さ、最速です」

「反対です。以後、お見知りおきを」

反対と名乗った少年は、最速の方だけを向いていおうとした。しかし最速が恐がって花火の後ろに隠れてしまっているため、仕方なく花火のほうを向いて喋る。

「で、どうして僕達をここに呼び出したのって質問には答えてもらえるのか？ 僕はむーとはやく帰りたいんだが」
「そう言うわけにも行かないのよ。これが。トラブル解決して欲しくて来てもらったんだから」

自由はそう言つと、反対に向かつて後は自分で言えといわんばかりに手で示した。

反対が話し出す。

「ふむ、どこから話そうか。……ではこの間街でナンパしたときの事からでも話そうかな」

「自由先輩、僕達かえるわ」

「待てって！ 大事なんだってここ！」

「ちっ……」

「まあ僕って見ての通り超格好良いじゃん？」

「……」

「で、まあ勿論のことそのナンパ成功するんだけどその女がしつこ

くてさ、別れようつつつたら僕の命を狙ってきやがった」

「過激だな、おい」

「そうなんだよ。僕、ないも悪いことしてないのに。全く、元の男の所に帰れっての」

「ん？ 元の男の所？」

「ああ、彼氏がいるところを奪ったからな」

「……それは死んだほうがいいと思うぞ」

あいての事を考えてないとかいう話ではなく、普通にこいつが悪の権化っぽかった。

「それでだ」

今度は自由の声。

「ほら、登校と下校が危ないだろ？ それでほら、最速ちゃんの能力を使えば一番安全だ」

ここには僚と言う物が有るが、どうやらこの反対と言う少年は家からの通学らしかった。

「いくつか質問が」

「何だ」

「むーの能力には限界がある。その家ってここからどのくらい離れてる？」

「11キロ」

これには反対が答える。

因みに最速の最大移動距離は23キロ前後なので楽勝で到達できる。

「次、その襲ってきた女の名前とや容姿、あと出来るだけ情報をくれ」

「名前は栗見愛子くりみあい顔はこんな感じだな」

反対は自分の携帯電話のプリクラを見せながら言う。厚化粧だが、なかなかの美人だ。

「どんな被害にあった？」

「脅迫メール送られたり、道歩いてたら上から花瓶落ちてきたり、これまた道歩いてたら爆竹投げられてり、一番酷かったのは階段から突き落とされそうになった時だな」

「過激だな」

「まあな」

「じゃあ次、むーは変態先輩の家を知ってるのか？」

今度は最速に向けて花火が言った。

「反対だ！」

「うっん。……知らないよ」

反対の言うことを無視して花火は続ける。

「じゃあ無理だね。むーは自分が知つてるところしか飛べないから。せめて一回行けば次から飛べるんだけど」

「だから今日、一緒に下校するんだろうが。今日の安全確保の為に花火、お前がいるんだ」

自由が言う。

「成る程、……じゃあ断る」

「何でだよ。どうして君はいちいち反対意見を出すかねえ。君こそ反対君だろ」

「止める、変態先輩と一緒にするな」

「だから反対だつてんだろ」

「入会から今日まで12件。何の話が分かるだろ？ 君が騒ぎを起こして俺達がそれをなかったことにした数だ。これと引き換えじゃあまだ足りないかい？」

「……」

「じゃあ決定だね。よろしく頼むよ」

「じゃあもう教室戻っていいよー、と自由は言いながら去って行った。いつもながら勝手な奴である。」

教室に取り残された三人はまたそれぞれに散らばっていった。

現在6時間目の開始を知らせるチャイムが鳴った。この三人がまた出会うのも、そう遠くはなさそうだ。

反対の件（後書き）

因みに反対先輩の名前の由来ですが、見た目と性格が真逆と言うことも考えたのですが、普通に変態からの派生です。
ということで花火くんは正しかったわけです。

デパートでの件

三十六奇人会の中に平均以上の武力を持つ者は花火を含め5人いる。その中で最も強い者は自身が定めた『ある時』にしかその武力を使わない。その次に強い者は自らの宗教上の都合で基本的には争いには参加できない。その次に強い者は戦闘狂であるためにある人によってその力の殆どを制御されてしまっている。その次に強い者は愛する人物を守る時にしかその力は使わない。そのため、その中で最も弱い花火に白羽の矢が立ったのは必然だったのだ。

しかしそれでも花火は、それでも花火はやっぱ反対（人名）のことを守るといことが生理的に受け付けられなかった。

「なあなあ最速ちゃん、今度一緒に映画でも見に行かないか？ ああ、勿論奢ってあげるからさあ、そしてその後は……ってどうしたのソイツの後ろになんか隠れて。ソイツなんかより僕のほうが絶対良いよ、ほらこっちおいで抱きしめてあげるから」

「黙れ、てめえは大人しく守られてろ」

「お前は黙ってるよ。そうだ最速ちゃん、メアド交換しようぜえ」
「それ以上むーに対して何か言うようだったら護衛対称であろうと問答無用でぶん殴るぞ」

現在、反対宅へと向かう電車の中である。先程から席に座っては最速の隣に反対が座り、最速を口説く（というかセクハラ発言）ことを繰り返していた為、大して混んでる訳でもないのに三人は立たままだった。

反対は花火の言葉に出していた携帯電話を仕舞い、あからさまにその美しい顔を歪める。

「何だ君は。僕に話しかける権利が君にあると思っているのか？
はっ、だったらとんだお笑い種だね。僕に話しかけていいのは美しい女性だけだよ。そう、君のようにね」

後半の台詞を最速に向けて反対が言う。しかもどこから取り出したのか薔薇まで手に持っている。

先程の自身の台詞は関係なく、ただ単にイラついたからなのだろう。無言で花火は反対を殴る。無論、狙いは顔面だ。

「ぐああああ！ 君は何をしたのかわかっているのか！ 僕のこの国宝級の美顔に傷をつけるなんて極刑ものだぞ」

そこまで強く殴ったつもりはないのだが、反対は大袈裟に車内をのた打ち回る。

「なんか美しい」国宝って連想が馬鹿みてーだな」

「なんだと！？」

「間違えた。お前馬鹿だな」

「言い方が直接的になっただけじゃねえか！」

このほかの客の迷惑も考えない口喧嘩が原因なのだろう。同じ号車の“男性”乗客は迷惑そうにほかの号車に移っていく（といってもこの田舎町、3号車までしかないのだか）。逆に女性の乗客は心なし増えたようにも感じられた。

そしてそのまま奇跡的に駅員から特に注意を受けることもなく、花火たち三人は目的地である反対家近くの駅に到着する。

「そうだ、この近くに大きなデパートがあるんだが寄っていかないか？」

反対の提案である。

流石に民家と田んぼしかない学園周辺と違って、ここらへんにはまあそれなりに大きな店が幾つかある。それはこれから看板が見えるほどには大きな物だった。大体ここから100m前後か。

明日からは最速の能力、瞬間移動で登下校するのでこれが最初で最期で最大の口説くチャンスだと思ったのだらう、反対の言葉にも熱が入っている。

花火は最初断ろうとした。しかし断るに当たって正当な回答を用意できるかといえそうですがはいはいきれなかったし、花火自身、後で最速とここを訪れようと思っていたのだ。その前に中を知っているであろう反対に案内されるのも悪くないと感じ、反対の誘いに乗ることにした。

「じゃあ決まりだね。いこーかー」

「おい、そこのお前ら」

反対が軽い調子で声をあげた時、彼らの前方に高校生らしき男子生徒四人が声をかけて来た。四人ともお世辞にも真面目な生徒とは言いがたく、それどこか明らかにこちらに対して敵意を向けている。制服を見るに不問不語学園の生徒ではない。しかしそれ故、声をかけられた目的が容易に想像できてしまう。

「なあなあ、今俺たちちよっとお金がなくて困ってんだよ。金、貸してくれねえかなあ」

古今東西、こういう人種が言うところの『金を貸せ』は金を返した実例がない。明らかにカツアゲである。花火は周りを見る。殆ど

の人間が見てみぬ振りをして助けはきそうにない。

「ああ？ 僕と最速ちゃんは今から買い物に行くんだよ。金で困ってるなら金融会社があるだろ。最近は利息少なくて良いらしいぞ」

反対が敵意をむき出しにして言う。自分より年上かつ人数も多い人間にその勇氣は立派な物だが、忘れてはならない。反対は中学生であり、非戦闘員である。その華奢な体からはとてもこの場を乗り越えられるような武力があるとは思えない。

無論、高校生達は先程の反対の言葉に納得するはずもなく、無駄に彼らに怒りを進呈してしまっているのが現状である。

（じゃあ僕の出番かな。流石にこの人数はきついけど）

花火は考える。花火も一応“武力”として奇人会に入会したのだ。腕にはそれなりの自信があるが、年上を4人、それも全員何か運動をしているのか比較的がっしりした体形になっている。これでは勝てるかどうか微妙、というのが花火の正直な感想であった。

しかしそのまま自分達が殴られるのを黙って待っているわけにも行かず、とりあえず拳に力を入れ、一步踏み出そうとした。

「反対先輩っ、しゅーくんっ」

そのとき動いたのは最速だった。最速は声を上げると二人の腕を掴んだ。目にも止まらぬほどの速さ、ではなかったにしろその高校生達が止めようにも最速と花火たちの間は短すぎたし、それにその動作が完結したところでとくに何が起こるわけでもない高校生達とは思っていたので自然、対処に遅れる。まあ対処しようとしたところで無駄な話なのだが。

三人は消えた。高校生はただ呆けることしか出来ない。

……余談だが、最速、これが第六話はじめの台詞である。

「別にあんな目立つところで飛ばなくても良かったのに。僕が倒せ
たぜ？」

「いや、そんなことするとまた面倒なことになるかなーって思っ

て……ごめん」

「まあ謝ることじゃないし。でも、むー、ありがとな」

「う、うんっ」

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

因みに最後の台詞は反対である。反対は今、最速と手を握れたこ
とに対して喜びに打ちひしがれている。女性と付き合うことを軽く
50はこなしていて、且つ手をつなぐ以上のことをほとんど日常的
にやっているといっても過言ではない反対なのだが、意外なところ
で純情である。

「うん、ていうか着いたな」

「そうだね。さっきの駅から見えてたから」

今花火達がいるところは先程反対が言っていたデパート前である。
最速は知ってる場所にしか飛べないが、見えてるところならそれ
を知っているということに出来る。

そして、駅からここまでは前述した通り100mほどしか離れて
いない為、目を凝らせばあの不良達の姿が確認できる。

「じゃあさっさと入ろうか」

またさっきの不良達とご対面と言うのも嫌だったので、花火は二人に先を急がす。

「ん、でもまた会ったらさっきみたいに最速ちゃんに助けてもらえば良いじゃねえか」

そんな花火の態度を不信に思ったのか反対が始めて敵意以外の視線を花火に送る。

「いいか、お前なにか勘違いしてるかもしれないけどな、むーの能力だつて万能じゃないんだ。むーが1日に瞬間移動出来る回数は、五回だ」

「……五回」

それは無限に瞬間移動できると思っていた反対にとっては、外な数字だった。

「まあ実質三回だけだな」

「何でだ？」

「登校一回、下校一回」

「……」

そう、彼女が下校という行為をしていること事態、とても珍しいことなのだ。能力を身に着けてからは殆ど初めてなのかも知れなかった。

彼女の体力のなさはこれに由来する。

「で、いま一回使ったから残り二回だな。それにそもそもむーの能

力的に人間にはばれにくいとは言え、目の前でやられりゃあ流石にわかつちまうしな。出来るだけむーが異能者ということを回りに悟られたくない」

「そうか……」

「まあこんな所でこんな話してても面白くねえや。さっさと中に入ろうぜ」

中では花火と反対がやはり険悪なムードだったが、それなりに楽しくやれていたと思う。ゲームセンターでは反対がUFOキャッチャーで大きな猫のぬいぐるみを取り、最速にそれをプレゼントしていた。最速もこれは嬉しかったようで素直にお礼を言っていた。彼らの距離も少しは縮まったのかも知れなかった。

「あ、悪い。ちつとオシッコ」

反対がそう言ったのは休憩がてら三人、ベンチで缶ジュースを飲んでいた時のことだった。ちなみにジュースはゲームに負けた反対の奢りである。

「へいへい、さっさと行って来い」

このベンチから男子トイレは目と鼻の先、数メートル程しか離れていなかった。因みに女子トイレは何故か結構離れた場所にある。

「最速ちゃんは覗きに来てもいいよ」

「……」

「あんまりむーをいじめるな」

「悪かったって」

そして今度こそトイレに入っていく。

花火はこのときの自分が迂闊だったと何年たった後でも思っている。反対は友人ではなく、護衛対称だということをこのとき、花火は完全に忘れていたのだ。

「おいおい、何分トイレに籠ってるつもりだ？ 腹でも壊したか？」

花火がそう言って男子トイレに入って行ったのは反対が入って行つてから、すでに10分が経過しようとしてきた時だった。

「あん？ 誰もいねえじゃねえか」

その中に、反対の姿はなかった。

「ああ、個室か」

しかし個室の扉が一つだけ閉まっていたので花火はそこに反対が居るものだと思い、ノックする。

「おい、いつまで入ってるつもりだー。早くしないと帰っちゃうぞー」

「す、すいません……、入ってます……」

しかし中から聞こえてきた声は明らかに反対の声とは似ても似つかぬ男の声だった。花火は困惑する。

その時、トイレの中にバイブの音が鳴り響いた。音の方を見ると今まで気づかなかったのだが反対の携帯が落ちていた。

「メールだ」

その中身を（悪いと思いつつ、本当に思いつつ）見た途端、花火は走り出した。目的地は最速のところ。

「不味いつ、反対がピンチだ！」

『コイツの身柄は預かりました。

ゲームをしましょう。一時間以内にコイツを見つけられなかったらコイツを殺します。

尚、警察などには連絡しないでくださいね。死ぬ時間が早くなってしまうから』

これが花火が見たメールの内容だ。

デパートでの件（後書き）

不良の描写を書くのは苦手です。なんてったって知らないから。ふつうこんな感じじゃあ絡んでこないかなあ？ まあそこら辺は大きく目に見てください。

デパートでの件 その式

「くそっ！」

花火は乱暴に壁を殴る。

（なにが『ここに来るのに断る理由は無い』だ。馬鹿か僕は。仮にも命を狙われてるつてのに暢気に遊ぶなんて。それも護衛対象を一人にする？　じゃあ何の為に僕は来たんだよ！　何を考えてたんだ！）

花火は反対の携帯を最速に見せた後、激しい自己嫌悪に陥っていた。そんな花火を見かねか、最速がいつもよりやや強い口調で声をかけてきた。

「しゅーくん、気持ち分かるけど、今はまず反対先輩を助けることだけに集中しよう？」

「ああ、悪い。そうだな、むーの言うとおりだ。僕がどうかしてたな。じゃあまず、むーは瞬間移動で一度学園に戻って応援を連れ来てくれないか？」

「え、でも大丈夫なの？　下手に動くとか反対先輩が危険なんじゃ」「連絡しちや駄目なのは警察だけだ。それにどうせ犯人もお前が能力者ってことは知らないだろうからリスクは少ない。と思う」

「うん、分かった」

そう言うや否や、最速の姿が消える。多分今頃は学園の第四倉庫あたりにでもいるだろう。

尤も、協力を要請したところであの奇人達は助けに来てくれない可能性も大いにあるが。花火はそう思うも最速には何も言わないで

いた。

「とりあえず闇雲に探し回っても駄目だ。なにか手がかりがないか……。ん？　というかそもそも犯人はどうやって反対を拉致ったんだ？」

犯人は反対が一人になるところを狙ったのだろうか、場所が場所である。女性であるところの犯人が入っていくのは難しいだろう。それにもし仮に男子トイレの拉致が成功したとしてもそこからどうやって反対を運んだかだ。女性の体で男である反対を運ぶのは困難であろうし、たとえ出来たとしても周りの人間が気づくはずである。何より花火が見落とすわけが無い。

「とすると脅して変装させてその場を離れたか。それとも排気口のようなところから出入りしたか……。いや、それは無いな。脚立がないとあそこから出入りなんて出来るわけないし」

花火が考えていると、ある最悪の考えが浮かんだ。

「もしかしてむーのような瞬間移動の超能力者？　それだとしたら確かに辻褄は合うな。でも、それだったら最悪だ。見つけようが無い」

ここで花火の目に先ほどから握られている反対の携帯が目に入った。

「これを使えば犯人と接触が取れるんじゃない？……？」

万が一の望みをかけて花火は犯人にメールを送った。内容は『お前は今デパート内にいるか？』

しかし当たり前のようにいくら待っても返信は帰ってこない。

だが、人一人を担いで、そこまでの長距離移動は来ないと推測されるし、何より犯人は女性だ。そんな体力はないだろう。

と、そこまで花火が考えていた時に、音もなく最速が帰ってきた。しかし周りには応援らしき人の姿はない。彼らの性格を考えれば当然といえば当然の結果か。

「意外と遅かったな。で、やっぱり協力してもらえないって？」

「ううん。一応協力はしてくれるって。3年生に理外先輩っていうとっても頭の良い人がいるんだけどその人から電話」

はい。と最速は自分の携帯電話を花火に渡す。恐らくはもうその理外という人間に繋がっているのだろう。

「もしもし花火だ」

「はっはー、初対面の癖にその図々しい物言い、良いねえ、僕はちよつと君のことが好きになりそうだよお」

妙に甲高い声で話しかけられた。花火はこの時、電話を握りつぶしたくて仕方なかったがこの電話が最速の物なのでなんとか我慢した。

「そうそう、人の物は大切にしないと駄目だぜい。それも最速君のなら尚更だねえ」

「……何の用だ」

「何の用？ それはもしかしてこの僕に聞いているのかい？ おいおいそれは筋が違うだろう、本当なら君が頭を下げるところだぜい。まあでも今回は特別に初回限定サービスでこの僕から教えてやってもいいけどねえ。で、聞きたい？」

「早く話せ」

『ふわわ、何の話だったかなあ?』

「おいむー、通話終了ボタンってどこだっけ?」

『ジョークだよジョーク。全く、ジョークが通じない人間はあっちじゃあやっていけないぜ?』

「どっちだよ」

『アメリカ』

「じゃあ問題ない。行く予定ないからな」

『ア、メアリケン』

「なんで発音よくしてもう一回言っただよ。別に発音悪くて聞き間違えたとかじゃねえから安心しろ」

『スウェッティメントオルンド』

「どこだっ!？」

『流石の君もこれは聞き取れなかったかい? まあそれはしょうがないか僕の発音はネイティオ並みとも言われてるからねえ』

「ネイティブな。それじゃあポケモンだから。あれはどうなんだろうな、どんな鳴き声をあげるかさえ覚えてないぜ」

『そんなことを話してる場合じゃないだろう? 早くしないと反対君が危ないんだから』

「てめえが振ってきた話題だ!」

『普通に答えを教えてやっても良いんだけどねえ。それじゃあ面白いから一つだけヒントをやるう』

「おい、人の命がかかってんだぞ」

『反対はいるんな人から怨まれている』

「あん? どういうことだ」

『僕が言えるのはここまでだねえ。あ、勘違いしないで欲しいのがこれは複数犯じゃないって所だね。それだとしても何の解決にもならないしかえって邪魔だろう』

「じゃあ単独犯って考えて良いのか?」

『ああ、そういえば奇人会こうちからもう一人応援寄越したってさっき永

久機関が言つてたぜい。多分ピストル君が行くことになるだろうから、まあ彼が来る前に終わらせることを推奨するよ』

「さつきからこつちのはなし片っ端から無視しやがって。何言ってるか訳わかんないんだよ」

『ああ、そういえばこれ最速君に伝えといてくれい。君達が僕らを頼る程の事となると大体予想はつくからね。というかこうなること事態予想済みだったし』

「だーかーらー、てめえは……」

電話は一方的に切れていた。

「何だあいつはっ！？ 喋りたいことだけ喋ってさっさと切りやがって！」

「まあまあ、理外先輩そう言う人だから仕方ないよ」

それ故、奇人会である。

「そんなことよりしゅーくん」

「何？」

「理外先輩に今の状況伝えた？」

「いや、伝えてないっていうか、お前が言ってたんじゃねえの？ 僕、その前提で話してたんだけど」

「うっん。それに多分永久先輩もだと思っけど」

「あ」

「ん？」

「理外からむーに伝言だ。『君達が僕らを頼るほどのこととなると大体予想はつくからね。というかこうなること事態予想済みだったし』」

「そっなんだ……」

ここまでの理外との会話の中で、花火が理外のことを嫌いになったのは言うまでもない。

「で、理外さんはこのことについてなんて言ってた？」

「『反対はいろんな人から怨まれている』」

「ん？」

（考える僕。理外の言っていたこと。いろんな人……別の女？ 確かに怨みをかっついていそうだが。

いや、それだとしても犯行を出来るかといえばそんなことはない。あれは男子トイレなんだから……ん？男子トイレ？ 男？ そういえば反対の奴がそんなこと言ってたような？ あれ、何のときだっけ？）

「わかったっ！」

花火は声をあげる。それに知られて周りの人が何事かと花火の方を見るが花火は気にしない。

「むー、ここで待っててくれ！」

「えっ、ちよつとまって。無辜も一緒に行く」

「いや、僕一人のほうが成功確立高いだろうし、むーが危ないだろうし、それに何より」

花火はすぐその男子トイレを指差しながら言った。

「犯人、男子トイレの中だぜ？」

デパートでの件 その参

花火は歩き出す。さっき反対が入って行って、自身も入った男子トイレへと。

中に入るがまたもや人の気配はなし。ただ、さっきと同じように個室が一つだけ閉められたままだ。花火はそれを確認すると、トイレの掃除用具入れの中から清掃中の立て札を出して、扉の前に置く。これで邪魔物は来ない。

「おい」

「は、はいつてます」

先程と同じ男の声がした。

「でて来いよ。そこに反対先輩いるんだろ？」

「何の話ですか？ 俺はここで用をたしてるだけですよ」

「しらばつくれんな。どこの世界に20分以上もトイレに籠ってる奴がいるんだよ」

「……お腹が痛いんですよ」

「ちっ……」

これ以上は何を言っても無駄な気がした。しかし突入するにしても反対が人質に取られている訳なので迂闊に攻撃も出来ない。

走ってくる人間の足音が聞こえたのはその時だった。

ガランツと言う音がして、花火がそちらのほうを向くと、不問不語学園の男子制服を着た生徒が一人立っていた。

先ほどの音はどうやら花火が立てた清掃中と書かれた立て札を蹴

ったのだろ。それが床に転がっている。

「よお、ここであつてるか？ 詳しいことは理外から聞いたから安心しな」

その男子生徒は髪が男子にしては長く、右目など殆ど隠れてしまっている。しかしその髪の隙間から見える目つきは凶暴で、ここに来る前に出会った不良なんぞより数段恐ろしかった。服装に関して言えば、制服のボタンは全て開いて、首に首輪がされている。あと何故か分からないが先ほどから腕を後ろに組んだままだ。

「お前、……だれだ？」

「ああ？ 理外から話聞いてねーのかよ。自己紹介は嫌いでな。あとで別の奴にでも聞け」

理外のことを呼び捨てにしてはいるが、校章を見るにどうやら2年生のようだ。

そう言いながら閉まっているトイレの個室の前に立つ。花火がその少年の後姿を確認したことで分かった。手を後ろに組んでいたのは手錠の所為だったのだ。

その手錠は勿論少年の右手を左手を完全に拘束していて、少年の自由を奪っている。花火は手錠と言う物を見たことはなかったが、それがおもちゃであるとは思えなかった。

（おいおい、変な趣味の人間じゃねーだろうな。奇人会ならありうるぞ）

「おらっ！」

「っ！！」

少年はトイレの前に立つとなんの躊躇もなくその扉を蹴破った。多分こういう事後処理も奇人会はしてくれるのだろうと花火は思った。

そして花火の予想通り中から出てきたのは一人の高校生と気絶している反対。高校生は手にスタンガンを持っている。

「なっ、何だお前は！」

「ああ？ 男だと？ 女じゃねーのか？」

「あんた理外の話聞いてたんじゃなかったのか？」

「面倒なところは聞かなかったからな」

「……馬鹿かお前は」

「殺すぞお前。説明しろ」

「反対に恨まれてるのは女だけじゃないだろ？ 例えば今回言えば彼女を盗られた彼氏とか」

「……ああ」

そう、花火は最初からそのことも視野に入れて護衛しなくてはいけなかったのだ。そして、犯人が男だとするとこの犯行は途端に容易になる。反対をスタンガンで気絶させ、そのままトイレの個室へ運ぶ。反対はどこにもいなくなつてなどいかなかったのだ。

「じゃああれか？ 結局コイツをぶっ殺しやいいのか。女じゃねーから手加減しなくていいよなあ？」

女だつたらお前は手加減すんのか。

この少年はそういいたいくなるような雰囲気だった。というか絶対手加減しなさそうである。

「まっ、まて！ コイツがどうなつてもいいんのか！」

反対の喉下に今度はカッターを取り出し当てる。わずかながら首には血が滲んでいた。

「ああ？ 反対だろ？ 俺、コイツ、嫌いなんだよね」

「は？」

「おいおい、護衛対象だろうが」

「俺にとっちゃなんでもねえよ。俺は敵の殲滅しか言われてねーかな。その途中で何人人間が死のうが構うことじゃねえ」

いや構えよ。

咄嗟にそう思ったが口に出せるような雰囲気では勿論ない。

「つーことで、……しねやあああああ！！」

少年から正確に放たれた蹴りはトイレの壁と少年の足で犯人の高校生足の見事にサンドイッチした。その威力は壁に亀裂が走るほどだったそうだ。

「うん、良くやってくれたよ。ありがと、ピストル」

第四倉庫。その後、男子高校生を警察に引き渡したあと、ここにもどって来たのだ。そして労いの言葉は永久機関のもの。

「あと女もいるんだろ？ さっさと探そうぜ」

「んー、まあそのうちね。今回のことであっちも手を出さなくなるかも知れないし。様子見にしよう」

「けっ、そんな平和主義じゃそのうち足元すくわれるぜ」

「そのときはそのときに対策を考えるよ」

一応年上である永久機関と話しているのは名を、ピストルといった。これは本人から聞いたわけではなく、先程の騒動の後、最速から聞いたのだ。

そのピストルと名乗った少年は奇人会の中で三番目に強い、らしい。永久機関曰く、ピストルのその性格ゆえに両手を自由にすると何をしてくすか分かった物じゃないので、ピストルの兄が2年前から付けさせているとのことだった。

「んで、この首輪はほれ、ここにGPSが付いてんだよ。まったく、人権も何もあったもんじゃねえよな。あいつめ、酷いことしやがる」

曰く、その首輪は頑丈で、たとえ刃物を使っても開けられないらしい。

「なあ気になったんだが、永久先輩」

この発言は花火である。

因みに今、この第四倉庫には永久機関と花火とピストル、それに

倉庫の隅に体育座りしている男子生徒と机に向かって何にかしている男子生徒の5人しか居ない。最速は一足先に瞬間移動で帰ってしまったのだ。

「ん？ なんだい？」

「最速はあんたのこともピストル先輩のことも自由先輩のことも知ってたぜ？ それなのに将棋先輩とか囲碁先輩とかを知らないのはなんでだ？ っていうか何であんた達は最速と知り合いだったんだ？ 確かここ、私立不問不語学園“中等部”三十六奇人会だろ？」

要するに中等部に来ただけの最速では自由達とは知り合いにはなり得ないということだ。

横を見れば、ピストルは飽きたのか布団をしいて寝始めていた。両手が使えないのに器用な物である。

「それはね、初等部にも似たような組織があるのさ、そこでぼくやら自由やらピストルやらと知り合ったんでしょ」

「似たような組織……」

「そ、まああつちは前半一緒に初等部二十四変人会って言うんだけどね」

「二十四人で、変人なのか」

「まあ人数にしては概ねそうだよ。初等部は6年制だし24しか枠がないからよつぽどの人しか居ないけど、まあ小学生なんて基本的にみんな何考えてるか分からないからその中でもって人ってことかな」

「ってことは高等部にもあるのか？」

「勿論。私立不問不語学園高等部四十八怪人会」

「今度は怪人で48人か……っていうかなんで12の倍数？」

「ふふつ、ぼくに聞かれてもしらないよ」

「まあ確かにそうだな」

「聞きたかったのはそれだけ？」

「ああ、納得した。じゃあまた」

「うん、ああ、明日もまた放課後にここに来てよ。今度は一人で」

「あ、何で？」

「紹介したい人がいるんだよ」

「シヨウカイシタイヒト？」

うん、と永久機関は言って後方を指差す。そこに居るのは体育座りをした男子生徒のことだった。

その人物は、置物と見まがえるほどに動かなかった。事実、さつき花火が見たときから一ミリたりとも動いていない。そしてその目はどこを向いているかいまいち分からず、しかしそれでもこつちを睨まれているような恐怖感その人物からは感じられた。

「今じゃ駄目なのか？」

「うーん、駄目って訳じゃないけどまた明日ってことでね」

「……分かった」

花火は不審に思いながらも第四倉庫の扉を開ける。外はもう真っ暗といっても差し支えないほど暗かった。

「うわ、むーに途中までも送ってもらったな」

そんなことを言いながら逆夢蹴人は歩き出す。

人形の件

現在蹴人は一人で第四倉庫前に来ている。昨日永久機関に言われたからだ。

しかし、

「何奴！」

「何奴！」

「見ない顔だな！」

「見ない顔だな！」

「ここを通すわけにはいかぬぞ！」

「そうだそうだ！」

「いや繰り返せよ」

蹴人の突っ込みである。

今、蹴人は倉庫前の二人の門番、将棋と囲碁に道を阻まれてしまっている。

「ついかに前に自己紹介したんだけど。一年生の花火です。よろしく」

「む、そうだったか？」

「覚えてない」

「門番としてそれはどうかと思うぜ。さっさと覚えろ」

そんなやり取りがあと5分ほど続き、蹴人は中に入ることが出来た。

「やつほー花火君。久しぶりだねー、元気にしてたかい？」

「別に久しぶりって程じゃねーだろ。まあ元気だけど」

今日も永久機関は机の上に座っている。どうやらそこを気に入っているようだ。

そして倉庫の中には今日は4人の人間。そして昨日言っていた少年も今日も倉庫の隅に座っている。

因みに永久機関、その少年のほかにはスキンヘッドのいかつい男子生徒と、なにやら金髪の美少女だった。スキンヘッドの方はこの間初めて花火が第四倉庫に来たときにもいた。

「うん、じゃあ早速だけど紹介しようかな。人形ちゃん、こっち来て」

永久機関がその少年に向かって声をかける。人形と呼ばれたその少年は何も言わずにゆっくりと立ち上がり、緩慢な動作で永久機関の隣までやってきた。

「んじゃ、紹介するよ。この子は1年の人形ちゃん。男子学生服を着てるけどれっきとした女の子だからね」

永久機関がそう紹介した。確かに近づいて顔を見てみれば、それは女の顔だった。しかし無表情で花火の方を睨んでいる為、それはお世辞にも美しいとはいえなかった。

身長は小柄な最速よりも小さく、恐らくはお下がりであろう男子学生服は可哀想なほどぶかぶかだった。髪の毛は伸ばしっぱなしで、所々自分で切っているのか極端に短くなっているところがあった。

「ほら、人形ちゃんも挨拶」

『こんにちは』

その少年、もとい少女は声を発しなかった。代わりに手元にある単語帳を花火に見せて挨拶をしていた。どうやら日常的な会話なら

その単語帳の中に書いてあるようだ。

因みに字は下手。読みづらいつたらない。

「……こんにちは」

少し戸惑いながらも花火が挨拶すると、人形はこれで自分の役目は終わったと言わんばかりに倉庫の隅に戻ってしまった。

「ええと、これは？」

「ああ、ごめん。人形ちゃん人見知りなんだ」

人見知りって言うレベルじゃないだろ。

花火はそう言いたかったが、何とか我慢することにした。ここの奴等はたいてい“そういう”奴等なのだ。諦めなければ。

「ええとまあ今回の依頼なんだけどね。

今紹介した人形ちゃん、君と同じ一年生で財力、知力の面で我が奇人会の大きな力の一つとなってもらってるんだけど、この子、転校させられそうなんだよね。だからそれを阻止して欲しいんだ」

「阻止ってなんだよ。誰かをぶっ飛ばせば良いのか？」

「花火君は考えが暴力的だなあ。怖いよ？ まあそんなに構えなかったっていいよ。簡単なこと。ただ、ちよつとの間人形ちゃんのお友達』役をして欲しいんだ」

数日後の日曜日。

花火と最速は人形宅に来ていた。

確かに、財力の面でも奇人会の力となっているというだけあって、家はそれなりに立派であった。とある高級住宅街にその彼女の家があり、その中でも彼女の家は異彩を放っていた。

「サイコロ？」

花火がそう呟いたのも無理は無い。彼女、人形の家は窓も無ければ屋根も見当たらない、とても家とは思えないような形をしている。しかもごく丁寧に壁は白一色でどうやらこの家を作った本人もサイコロをイメージしたようだった。

当たり前だが人形も本名ではないので、表札には『吉舎崎』と書かれてあった。これが人形の本名か、と妙なところで感心する花火であった。

「というか扉どこだよ」

花火が問いかけると、人形は壁の一部に手のひらをぺたつと付けた。その途端、壁の一部から青白い光が放たれ、自動的に横開きのドアが出現し、開いた。

「指紋認証かよ……」

「すごい……」

二人が素直に感心していると、『すぐ閉まるから』と書かれた単語帳をもった人形が家の中で手招きしていた。

「やあやあ皆さん。本日はわが吉舎崎家へようこそおいでくださいました！」

まず目に入ったのは人形父（多分）である。

娘とは似ても似つかぬハイテンションに、重力に逆らうようにして上向きに立った口髭が特徴である。因みに人形父、高名なマジシヤンらしく、部屋のいたるところにマジックの道具があった。

言いながら人形父は手からポンつとハトを出す。なかなかベタだ。

そう、今回の依頼はこの父親が原因である。

この人形の父親、かなりの子煩悩で特に娘である所の人形には甘かったらしい。その反動か、人形は喋らなくなり、父親がそれとなく（かどつかは謎だが）学園側に探りを入れてみたところ、人形には友人と呼べる人間がいないことを知ったのである。

さあここで子煩悩パパはどうするか。勿論対策を考えるのであるが、彼は娘でなく学校に問題があると考えた。で、転校。

そしてここで困るのは人形本人、そして奇人会。人形は人形であるの奇人会という場所を気に入ってるし、奇人会は人形の類稀なる才能を知ってるからこそ手放したくない。

そこで考えられた作戦がこの『とりあえず友達っぽい人連れてきましたよ作戦』命名永久機関である。

そしてここで白羽の矢が立ったのが人形と同じ一年の花火。本当は同性が良かったのだが、彼女は性格的にとりあえず大体の人間から恐がられている為それは諦めた。勿論それは最速も例に漏れず恐

がつている。

しかし、では何故その最速がこの場にいるのかと言うと、それは花火が最速に「僕、日曜日に人形の家に彼女と二人で行くから」といった旨を最速に伝えたからである。最速からしてみればそれは気になる男子が別の女の子と他でもない自宅デートをするという内容なのだからいくら消極的な最速でもそれを阻止しない訳も無く、たとえ相手が苦手な人形でも我慢して付いて来たという訳だ。

「ええと君達は？」

「僕は逆夢蹴人です」

「あ、畦道無辜ですっ」

最速、早くも緊張している。やはりこういうことに彼女は向いていない。

そして花火が人形の方を見れば、何故か花火と最速を残して一人でどこかへ行くこうとしていた。

（おiiiiiiiiiiii！ てめえどこ行くつもりだ！）

花火は小声で叫ぶという芸当を見せながら、人形の肩をがっしり掴んだ。

『部屋で勉強』

人形の単語帳である。

（おかしいだろ！ こっちはお前の為に来てるのに、友達アピールしないと駄目じゃねえの！？）

今度はメモ帳を取り出してなにやら書いている。どうやら単語帳

だけではカバーしきれない会話になったようだ。

『それには感謝している』

『が、』

『私は友人を家に連れてきたことが無いので何をすればいいかわからない』

「とりあえず『が』で1ページ使うのはよしといった方がいいと思うぜ？」

「……しゅーくんしゅーくん、どうしたの？」

「むーか。なんかこいつ、友達を家に連れてきたことないから何すればいいかわからないんだってさ」

「ゲームとかは？」

『もってない』

「じゃ、じゃあお外で遊ぶとか……」

『運動、キライ』

「お勉強会みたいなことは……？」

『勉強は一人でするものだと思っている』

「うう、ごめんなさい……」

「何むー、泣かせてんだこらあ！」

『あまり怒鳴らないで欲しい。この計画が失敗に終わってしまうぞ』

「そうでなくとも、もう終わりそうだよ！ 主にお前の所為で！」

しかし確かに、ここまで人形を怒鳴りつけていればあの過保護な父親が飛んで来そうなものだが、と不思議に思っ
て振り返ってみれば、あの父親の姿はどこにも無かった。

と、その時、どたどたと慌ただしい足音がして、その音がした方を見てみれば、案の定人形父が何かを持って走ってきていた。
なにやら少年のような中年である。

「みんな！ トランプあった！ これやろう！」

なんか面倒臭いこと言い出した――！

三人の心が一つになった瞬間である。

人形の件 その貳

ばば抜き。

恐らくは日本トランプ界ではもっともポピュラーであろうゲームを花火達はやるうとしていた。

『やだ。メンドイ。なんで中学生にもなつてばば抜きだ。絞めるぞ』

何をだ！ 瞬間的に花火はそう思ったが、しかし花火もばば抜きは確かに暇そうだか思っていたので特に人形父に対してフオーローはしない。

「何でだ？ やっぱりこの子達と一緒に遊ぶのはいやか？」

『ちげーよ。どちらかと言うとお前の方がいやだよ』

「よし、じゃあやろうか」

『人の話を聞け！』

単語帳を見せているだけなのに聞けも何も無いだろうが、人形はそういった。もとい書いた。

「うーん、じゃあ何か賭けようか」

「賭け？」

人形父の言葉を繰り返す最速。

「うん。そのほうがやる気が出るだろう？ そうだなあ、もし君達二人のうち、どちらかが一位になったなら、奇人会への寄付を増やしてあげよう」

これは花火、最速ともにモチベーションの上がない提案だった。

「そしてもし〇〇が勝った場合は」

『私の一人部屋を作る。もしくはお前、この家から出て行け』

どうやら人形は一人部屋を持っていないようだった。

「厳しいなあ、分かったよ」

人形父は何も提案してこなかったが、それは一人大人だから遠慮したのだろうと簡単に察しが付く。

「じゃあやろうか」

いつの間に来てきたのだろう、お茶と菓子を持って人形父がそういった。その目は何かを企てるように見えたが、誰も気づく者は居ない。

「そつえば」

唐突に人形父が話し出す。ばば抜きの中のことだ。

「聖クラнда女学園のことちゃんと考えてくれたかな？」

多分人形に言ったであろうその声は、人形の転校を不意に思い出させた。

『行かない』

「なんでだ？ いいところだろう？」

『行かない』

「……ふう」

このように、我が愛しの娘は行かないの一点張りだね。本当に困ってるんだよ。という風な視線を最速と花火に向けた。それに対し二人は特に反応を示さない。まあ当たり前だろうが。

結果から言っと。

これは10戦やって一番優勝が多い人が勝ちと言うルールだったのだが、

最速、2勝。

花火、5勝。

人形、3勝。

人形父、0勝。

結果、花火の勝ちで、奇人会への寄付が増えることとなった。

「嬉しくねー」

花火の正直な感想である。

その時とんとん、と花火の肩を誰かが叩いた。見れば人形だった。

『だったら私が勝てるように協力してくれても良かったじゃないか。友達設定だろ』

「馬鹿言え、ばば抜きで勝たないようにするとか無理だろ」

そう言って人形を睨み返す。

「はっはー、してやられたねー。どうだい花火君。僕と1対1で勝負と言うのは」

「ん、なんでだ？ 今更」

「いやいや、他意はないけれどね。ちょっと父親としていいところを見せとこうかなあとか思っただけさ」

「いやあ、まあ、いいですけど」

「今度はそうだなあ、君に賞金5万でも」

「な!？」

『おい!』

人形が珍しく表情のある顔で単語帳を見せる。

「まあ、良いですよ」

花火にとって、いや全国の中学生にとって5万と言うのは相当な大金だ。これで断る方がおかしい。

そして花火は確信していた。さっきの勝負、さりげなく人形父はぶりだった。というか一勝もしていない。だから負けるはずが無いと。それにもし花火が負けたとしてもデメリットは無いのだから、と、花火はそう思い、二つ返事で了解した。

「うん、じゃあ良いね。因みにゲームを変えさせてもらっても良いかな？」

「いいけど、何にするつもりだ？」

「せっかくの賭け事なんだしポーカーはどうだい？」

「いいよ」

人形父がトランプをシャッフルする。それを「ここは公平に、君もシャッフルしなさい」と、花火に渡す。

「ん、終わったぜ」

人形父にトランプを返す花火。

「んじゃ、君からどうぞ。あ、因みにカードの代えはなしで」

それを二人の中央に置き、花火にカードの束を譲りながら人形父は言う。

「あ、そうだ」

と、花火がトランプの束に触れる直前、人形父は言う。

「僕が勝った場合のルールを決めて無かったね。僕が勝った場合は愛しの我が娘を“転校”させる。いいね」

「！！！」

『おい！』

驚く三人。しかし花火は同時に納得した。

なにか変だと思ったらそう言う訳か。でもここで受けないって手もあるんだが、いかんせん5万は魅力的だな。花火はそう思い、人

形父の申し入れを受けることにした。

「ああ、いいぜ」

「しゅーくん！」

「いだ！」

最速は驚き、人形は何も言わずにただ殴る。

「ただし人員交代だ。あんたの相手は僕じゃなく、むーがやる」

畦道無辜を指しながら花火が言う。

「ええ！？」

「大丈夫だつて」

「まあそれでも全然構わないよ？」

最速の耳に耳打ち。最速は決意したように2センチほど頷いてトランプに手を伸ばす。

「やります……！」

最速の小さな手がトランプの束に伸び、そして一番上から順に5枚取る。

「……」

しかしこのとき人形父は勝利を確信していた。別段、無辜の手札を見たわけではない。まして自身の強運を信じているわけでもない。

ただ単に、彼はイカサマをしたのだ。

イカサマとはいっても、そこまで難しいことをしたわけではない。ただ、花火からシャッフルされたカードを返されたあと、一番最初の5枚はばらばらのカードを置き、次の5枚のカードはそろえて置いた。ただそれだけだ。しかしそれで最初に花火がとってしまえば、花火の負けは確実となる。まあ実際は最速と勝負している訳だが。

ここでは簡単そうに言ってるが、相手に気づかれぬよう10枚ものカードを置くのは至難の業だ。しかも花火にカードの束を渡されてから少しの間しか人形父はカードに触れていない。しかしそこはマジシャン、彼にとっては簡単なことであっただろう。

そして今までのことも全て布石。最初に負けたのは自分が弱いと相手に思ってもらうためだし、賭けをし始めたのはポーカーで賭けの話をして不自然に思われないように。勿論一度目で自分は賭け事をしなかったのはポーカーが始まる前に何を賭けるか聞かれて、それで勝負を降りさせないためだ。

まあ花火ならどっちにしろ受けたであろうが。

「とりました」

最速がカードを上から順番に5枚取り、人形父は冷静にその様子を見守る。

（意外と冷静だな。ノーペアに設定してた筈なんだが）

「それじゃ、次は僕だね」

今度は人形父の番だ。人形父は勝利確実のカードを5枚、上から順番に取っていく。

「……？ ……！！」

人形父は驚く。あまりにも不可解で思考が止まりそうになるが、勝負は待ってくれない。花火は人形父に声をかける。

「早く見せ合いつこしよーぜ？」

「……………ノーペアだ」

先に自身の手札を明かしたのはイカサマをしていたはずの人形父だった。

「ロイヤルストレートフラッシュ……………です」

「……！！」

そして最速はポーカー最強の組み合わせ、ロイヤルストレートフラッシュを叩き出していた。あり得ない。その言葉だけが人形父の頭をぐるぐる回る。

（もしかして……………“間違えた”！？ 確かに僕はプロのマジシャンだし今まで何万回とトランプに触れてはきたがしかし！ 何千回に一度、何万回に一度！ 僕だって間違うこともあるだろう！ トランプの5枚の組み合わせの上下を間違えるなんて素人でもないよいうなミスをすることもあるだろう！ しかしそれがたまたま今日だったなんて、なんて運が無いんだ——いや、）

「君は、本当に運が強いんだね……………」

人形父は脱力した風にそう呟いた。

そして、人形の転校の件は、すっぱりと諦めたと言う。

「ふはははは！　今回は負けはしたが、次は絶対に打ち負かして見せるぞ！」

どうやらそうでもなかったらしい。

夕方になり、花火と最速が人形の家を出る。一応だが、任務は達成されたようだ。

「あ、ここにあつたんだ」

「うん」

二人が見ていたその視線の先には、住宅街の道路に捨てるようにおかれていた、『記号も数字もばらばらの5枚のトランプのカード』があつた。

「しっかしあのおっさんもえげつねーよな」

そのカードを拾いながら蹴人は言う。

「片方はノーペアで、もう片方はロイヤルストレートフラッシュだよ。見事に僕の予感が当たったじゃん」

「うん。でもし違うこととしてたらどうするつもりだったの？　そんな、無辜が『最初の5枚をレポート能力で飛ばした』からって、全く関係ないイカサマだったり、そもそもイカサマやろうとしてな

かったりしてたら」

三十六奇人会所属、畦道無辜の能力は『瞬間移動』である。それは自身が移動すること、自分以外の物を移動させられることの出来る、大きく二種類の能力がある。今回無辜が使ったのは後者の能力だ。

無辜がトランプの束に触れた途端、その能力を使い目に見えぬ速さでカードを消した。無辜の能力は『人に認識されづらい』という特性を持つ為、数が減っても誰もそのことに気づかなかったのだ。

人形父の作戦に目ざとく気づいた蹴人は、無辜にこの方法でイカサマにイカサマで返させたのだ。

「まあそんな時はそんな時。正々堂々戦うか、また別の作戦でも考えてたよ。まあでもポーカーなんだから、どっかに失敗する可能性のある賭け事の方が面白いだろ？」

「……」

同意を求めるように無辜の方を見たが、どうやら無辜はそう思っ
てはいらしくただ黙りこくるだけだった。

「今回のポーカーで」

人形の家もそろそろ見えなくなってくるという頃、不意に無辜が喋りだした。

「今回のポーカーで今日の分の能力全部使っちゃったから、しゅーくん。家まで送ってって？」

無辜の一日の瞬間移動の回数は5回。トランプは一枚一枚独立し

ている為、それぞれ能力を使うしかなかったのだ。

「ああ、分かったよ」

蹴人は苦笑しながら呟く。無事の家までの道のりが、楽しくて仕方が無いのだ。

赤塚阿波の日記

私達の通う不問不語学園には、とにかく変な人が多い。

つてな感じで書き始めると荒れ暮れ者の集まる不良学校みたいに思っちゃう人も少なくないだろうけどそんなことは全く無い。基本的には普通の学校だ。

ただ、一学年に10人前後変な人がいる。まあ少し多いかな？

変な人って言っても、その中にもいろんな人がいる。

恐い人、危ない人、おかしい人、すごい人。

どうやらその人たちはその人たちで集まってなにかしてるみたいなんだけど、私には良く分からない。だってマトモな生徒ですから。その人たちを見てると、何時でも楽しそうで、少し羨ましいなあとか思ったりもするけれど、私はあの仲間になりたいとは思わないというか関わり合いになりたくない。

もし、そのような場面に遭遇してしまったら、逃げる。有無を言わずとりあえず逃げる。他のみんなだってそう思ってるはずだ。

「それは本当に酷い話ですわね。いくらわたくしでも傷つくことがあるのですわよ？」

そうというのは目の前に居たら走って逃げたしたい人種の変人さんと同じ学年、同じクラスながら1年間教室でその姿を見ることはなく、2年に進級した今、何故か少し会話するようになった九々外歌^{くぐがいうた}雪^{ゆき}さんだ。

「何故かって……それはあなたが原因でしょうに」

容姿に比例して、声も綺麗な九々外歌雪さんがそう思わず聞き入ってしまいそうな声で話し出す。

あれ？ そうだっけ？ 私は記憶の扉をこじ開ける。何故か鍵がかかっていたようで、なかなか開いてくれない。

ああ、思い出しだ。あれた確か1週間前。

バツタリ （私と九々外歌雪さんが廊下で出会う音）

「きゃあああああああ！」 （私の悲鳴）

バキッ （私が九々外歌雪さんをぶん殴る音）

ばたっ （九々外歌雪さんが倒れる音）

「きゃあああああああ！」 （私の悲鳴）

……それから流石に罪悪感を感じた私は、九々外歌雪さんを保健室まで運び、それから親しく（？）なっただ。訂正訂正。親しく無い。今日であったの二回目だ。

っていうか道理で思い出しなくなかったわけか。

「あの時はわたくしも流石に驚いてしまいましたわ。いきなり女性に殴りかかってくるとは」

「あははー。いや、一年の頃から同じクラスで、顔は写真で知ってるのに姿は見たことない人がいきなり現れたらびっくりしちゃうよ」
「それでもすわよ」

そりゃ、私だって普通に写真で見たとおりの人が出てきたら殴ったりはしなかったんだろうけどさあ、

「？」

そう可愛らしく首を傾げる姿はまさしく女性だった。

でも、この九々外歌雪。生物学上の分類は、男性なのだ。ありえねー。

流れるような長い黒髪。病的なまでに白く、細い四肢。そして誰もが羨む美貌。

この全てを兼ね備えた人間が、九々外歌雪という男なのだ。

「ってというか九々外歌雪さんはこんなところで何してんの？」

こんなところ、というのは学校の教室だ。私と九々外歌雪さんのクラス、2年12組だ。

まあ普通の人ならむしろ学校にいたる間はここにいるのが普通なんだけど、この子はちつとばかり事情が違う。教室で見かけることはまずあり得ないから。

因みにみんなが授業している間どこにいるかそれとなく聞いてみたけれど、どうやら答えてくれる気は無いらしい。

そして今、教室には私の九々外歌雪さん以外誰もいない。皆どこかに行っちゃった。先生まで。もう普通なら一時間目が始まっている時間帯だというのにそれは不味いだろ。

まあでもそれも仕方ないというべきだろう。学年内で変人として十指に入るほど有名な九々外歌雪さんを恐がらない生徒はなかなかいない。実際、私だって今とても緊張している。

「なにつて。ここはわたくしの教室ですよ？　いてはいけないのですか？」

「いや、いけないってことはないけど……」

だってここに来るの始めてじゃん。

……はっ！　もしかしてこないだ殴った仕返し！？　だしたら超恐いぞ！　なんか最近変人達で組織立ってきてるっていう噂を聞

くから何をされるか分からない！ 下手すりゃ死ぬ！

「……そんな物騒な理由では来てないので安心してくださいませ……」

私の表情から察したのか九々外歌雪さんがそんな風に言った。

「というか人殺しなんて物騒なこと出来ませんわよ」

「あれ？ でもほかの変人さんとかは出来そうじゃない？」

しまった。なんかちよつと失礼なこと言ってしまったかもしれない。完全に偏見だろう。

「まあ確かにそういう人もいますわね」

いるんだ。……………恐ッ！

「でもわたくしはただ単にあなた様とお友達になろうとしただけですわ。わたしたち変人以外としゃべるのは久しぶりでなかなか楽しかったですし」

前回の会話で楽しかった場面なんてあっただろうか？ 普通だったと思うけど。普通が珍しいってこと？

「あ、まあそれくらいなら良いけど……」

「あと、それとこれは別に本題ではなくてたまたま見つけて今思い出したから言うだけなのですけれど……」

そんな風に九々外歌雪さんがもったいつけながら、続ける。

「今日学校に来る途中で瀕死の猫を見つけたのであなたに治療してもらおうと思ひまして」

「先に言おうよ！」

教室の机に無造作に置かれたそれは、確かに猫だった。でも自転車に引かれたか何かしたその猫は血だらけで方用の前足がありえない方向に曲がっていた。

「なんで私のところに持ってきたの！？ 治療なんて出来ないよ！保健室！」

「だってわたくしが前にあなたに殴られた時、介抱してくれたじゃないですか」

「無理無理！ あれ、ただベットに寝かせただけだから！」

「でも、保健室に行くのは些か抵抗があるのですわ」

……ん？ ああそうか。確か保健室には飛び切りの変人が居座ってたんだ。前に私が行ったときはいなかったから忘れてた。……でもその発言、私達が言うなら分かるけど、なんで変人の九々外歌雪さんが？

「変人の中にもランク付けのようなものがあるのですよ。あの保健室の番人と、あとあのホームレスのような最強にも会いたくないですわ」

ふうん、大変なんだな。ってかやつぱりあの人は変人の九々外歌雪さんでも駄目か。

「ってそんなこといつてる場合じゃなかった！ 猫！ どうしよう！？」

「仕方ありません。あなたが介抱できないというのでしたら、一緒

「についできてください」

「へ、どこへ？」

「保健室ですわ」

「うう、やっぱり無理だよ。なんか保健室から禍々しいオーラを感じるよ」

そんな感じで保健室前。前回来たときは慌てすぎてそんなこと意識する暇も無かったから良かったけど今回は違う。こうやって保健室を遠めに見てるのが精一杯だ。

でもそんなことも言ってられない状況になってきた。猫が段々ぐったりしてきたのが分かる。もう少しで死んでしまうかもしれない。

「一緒に。一緒にですわよ。せーので開けますわよ」

九々外歌雪さんがゆっくり扉の前まで進み、私にそう言いかけてくる。

「ちょ、あなた同種の人間なんだから、前に立ってよ！」

「無理ですわ！ あの人の前ではわたくしなんてあなた達とさして違いはございません！」

「そつでなくても男でしょ！ 女の子は護りなさい！」

「今は女装しているので関係ないですわ！」

バンツ！

扉の前で醜く言い争っていた私と九々外歌雪さんが同時に固まる。だって、いきなり開いた保健室の扉の先には居たからだ。

私達が恐れていた保健室の番人。その人が。

ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい！！怒ってる！？怒って
てる！？そうだね、うるさかったよね！ごめんなさい！ご
めんなさい！…………。

私は心の中で沢山謝る。緊張しすぎてとてもじゃないが声を出せない。

と、一秒が永遠にも感じられる一瞬が終わりを告げる。いきなりその保健室の番人さんが私達なんかいないようにスルーして、まだ一時間目が始まったばかりの学校の廊下を走り出したのだ。当然、廊下を走っていることを注意する人は居ない。

「え？」

となりで九々外歌雪さんが呆けたように声を上げる。うん、私も同じだ。

「あら？　もう授業が始まつてる時間じゃなかったかしら？　あなた達、どうしたの？」

突然聞こえたその声に、私達の凍結は解けた。

声の主はこの保険医。普通の人なのに保健室の番人さん他、色々変人さんと話せる変わった人種だ。

「ってあらあら、その猫。成る程、ちょっと待っててね」

私が抱えていた猫を見て察したのか、保険の先生は何かを取りにどこかへ行ってしまった。

ウーウーウーウー。

あれ、どこかで救急車が走ってる。

「電話ですわ」

「着メロそれがよ！」

思わず突っ込んでしまう。今日のこの数分で随分親しくなったもんだ。

「はい。ドレスですわ」

どれす？ 何だそれ。あだ名か？

「……はい。……はい。………分かりましたわ。すぐ行きます」

おいおい、なんか嫌な予感しかしねーぞ。

「すみません。何にも変えられない大切な用事が出来てしまいました。申し訳ないのですが後のことはよろしく頼みますわ」

「何にも変えられない大切な幼児？ 彼女に子どもでも出来たの？」

「では！ 失礼します！」

ボケスルー。なんか寂しい。

まあいつか。一時間目この調子だとサボれそうだし。

私は小さくなっていく九々外歌雪さんの背中を見ながらそう思った。

諏訪一理の日記

俺達の通う不問不語学園には変な人たちがたくさんいる。

まあ沢山といってもそんな右を見ても左を見ても変人ばかりという訳ではなくて、一学年に10人前後理解し難い人種がいるだけだ。9割以上は普通の人。

ただ、やっぱりその変な人の中でもランクがあつて、下(?)は普通に日常生活を遅れるけれどちょっと人よりずれてるみたいな人から、上(?)は日常生活もマトモに送れなくて完全に社会のはぐれ者と化している奴まで選り取り見取り、様々だ。

で、その変人の中の最高峰が今目の前に居る。

変人の中の変人、私立不問不語学園中等部の王、変人ランク^{エス}SS^{トリプル}、学園始まって以来の“問題外”児、ミスターアウトサイダー、異世界人、最底辺にいる最強。

いろいろ呼び名はあるが、俺はどれもこれも未だにその存在をちゃんといい表せてはいないと思つてゐる。こいつの存在を隅から隅まで言い表せる言葉などこの世界には存在せず、しかしあるとするならばそれは一つしかないだろう。

楽家嬉々^{らぐやけき}

それが俺の愛して止まない変人の名前だ。

「よう、嬉々。おはよう」

「んー、……おはよ……。久しぶりだね一理^{いちり}。……なんかご飯ちょーだい」

朝、俺は廊下で寝ていた嬉々に声をかけて起こす。こうしないと嬉々はいつまでも寝ていて俺が話しかけるタイミングを失うのだ。

楽家嬉々、コイツの一番目立つ特徴といえば『学校で生活している』と言うことだ。この学園には寮と言うものがあるし、家庭の事情さえあれば殆ど無償で学校側がその寮を貸してくれるのに、嬉々はそれを良しとせず校舎内で生活しているのだ。

そして嬉々はお金と言う物を持つことが無く、食料は全て人から奪って得ている。しかし存在が存在ゆえ誰もそれを注意することは出来ないのだ。教師も例外じゃない。

「コロッケパンと焼きそばパン、どっちがいい？」

「……どっちも」

あと意地汚い。

まあ汚いのは意地だけではない。前述の通り、嬉々はお金を持ってない為体を洗うという行為をすることが無い。本人曰く1週間に一度ぐらいのペースで冷水で体を流しているそうなのだがその程度で体の垢が取れる筈も無く、嬉々の体からは絶えず異臭がしている。

これも人に避けられる理由の一つ。っていうか殆どホームレスのよくな生活だ。学校はコイツを放っておいて良いのだろうか。教育委員会的に絶対問題がある。

嬉々が自分の手でパンを触らないように気をつけながら器用に袋からパンを取り出して食べる。自分の手が汚いことを自覚しているのだらう。手ぐらい洗え。

「つーかお前今日は女子の制服なんだな」

「……うん。……久しぶりだっけ……か？」

前に見たのがい週間ぐらい前だったからなあと記憶を探ってみる。

嬉々はよく服を買える。

それはやっぱり買っているという訳ではなく、誰かから貰ったり奪ったり拾ったりしているのだらう。嬉々はいろんな服を着るがどれもよく似合う。男物も女物も。

女顔で小柄なことから女性ではないかと思われている一方、怒った時が果てしなく恐く胸が無い為男だとも言われている。要するに良く分からん。

今俺が嬉々のプロフィールを書けといわれたら、名前、楽家嬉々で終わりだ。コイツと喋るようになってからだいたい1ヶ月が経過しようとしているが、未だに嬉々について新しい情報が入ってこない。

「なあ嬉々。お前って男なの？ 女なの？」

分からないから聞いてみる。大事なことだ。

これでもし嬉々が女だったりしたら異名のいくつかを変更しなくてはいけない。不問不語学園中等部の女王、ミスアウトサイダー、だ。

「おとこ……？」

これは『私は男です』って意味で受け取っていいのか？

「おんな……？」

ちがった。『男とか女とか何言ってるか分かりません』だ。コイツ、男女の概念がねえのか。

ぐうぐう。

「……」

「……おなかへった」

「早っ！ 今食ったばっかじゃん！」

しかも人のパン二つも取りやがって。

「そんな事言っただって……昨日から何もだべて無かったし……」

ああ。

そういえば俺がこの間「俺が食いもんあげるからあんまり人から盗るなよ」みたいなことを話したのを律儀に守ってたのか。

ぶっちゃけあんまり守ってくれるとは思ってなかったから意外だ。

「だって……嬉々に何か注意したの……一理が始めてだったから」

……成る程。まあこの学園にひしめく変人奇人さんと言えどもこの楽家嬉々を相手取れる人間はそういないだろうからな。

「でも……不思議だな。……一理は何で嬉々に声をかけようと思っただの？」

ここで俺は言い淀む。
お前が好きだからだ。とは流石に言えないよなあ。男か女が分かるんし。

俺が楽家嬉々、変人中の変人に会ったのは中学二年の春。つまり今年の四月からだ。

勿論初等部時代から楽家嬉々は相当以上に有り得ないほど有名だったけれど、俺も校内で何度も見かけることはあったけれど、その当時の俺は他の奴等と同じ様に嬉々を恐がっていて、一定以上の距離から近づく事はなかった。

しかしあの日、新しいクラスが発表され俺が12組への教室へと向かう途中にそいつはいた。

楽家嬉々。

その日もその日で相も変わらず廊下で眠りこけていた。
一年ぶりに見かけたそいつを（多分俺の一個下なのだろう。俺が一年の頃には中等部校舎では見かけなかった）俺は当然のように見ない振りをしながら足早に去ろうとする。が。

「……おい」

初めて聞く楽家嬉々のその声は驚くほどに美しく、頭では一刻も

速く逃げ出したいと思っているにも関わらず俺の本能がそうはさせなかった。

気づけば振り向いていた。

「……その背え高……のっぽ……」

別に俺はそこまで高いという訳ではない。まだ中学二年と言ったともあって165cm前後だった筈。しかし周りには不思議なことに俺しか居なかったので多分それは俺を指しているのだろう。というかこいつが小さいだけだ。多分150ない。

その嬉々が続ける。

「なんか……食いもん……だせ」

その声はとても綺麗な筈なのに、俺はひどく緊張した。全身の毛穴と言う毛穴から汗が吹き出て、奥歯がガタガタと鳴る。この嬉々の言うことには逆らえなくて、絶対に俺達凡人はこの人の下に位置していること思い知らされる。

王だ。王がここにいる……！

震える手でまだ新しい制服の中から何か食べ物を探す。（初等部のころは楽家嬉々対策として常に食べ物を持ち歩くのがこの学園の常識だったが、中等部になってから嬉々を見かけなくなった為その習慣も薄れた）

畜生！ 嬉々に食い物を奪われた連中は皆こんな思いしてきたのかよ！ よく登校拒否とかにならなかったな！

そんなことを思いながら、制服をまさぐる。奇跡的にあったその

食べ物、後で友人達と遊ぼうと思っていた物だった。反射的に差し出してしまふ。

不味い。

そう言う風に思ったのは何も友人達を憂いてのことではない。俺が反射的に差し出してそれは、よく菓子屋さんとかで見かける口シアンブルーレットの要素が組み込まれた、三個中一個は激辛使用になっている飴玉だった。

あ。

やっぱり戻して逃げようと思ったが、もうすでにその飴は俺の手元にはなかった。

よほど嬉々はお腹が好いていたのか、ものすごい勢いで飴を受け取ると、まるでそれがパンかご飯でもあるかのようにぱりぱりと歯を使って頂いていた。顎、丈夫だな。

そしてそれは最初の一つ目だった。

嬉々の顔が真っ赤に変貌したと思ったら、飴玉をすごい勢いで吐き出した。

「おいっ、……おま——」

楽家嬉々はその場に倒れた。空腹だったらしい。

「……ん、……ここは……？」
「屋上です」

目の前で倒れられて流石に責任感を感じた俺は友人の寮室から勝手に拝借した布団で嬉々をくるみ（失礼だがとても素手で持てるような清潔さはなかった）屋上まで運んだ。ここに来た理由は一つは我が友人達に俺が嬉々と知り合いであると誤解させないためで、もう一つは2年のしょっぱなからサボタージュは流石に不味いので先生から逃げるためだ。後者は完全に現実逃避だが。

「……？」

「えー、先程は妙な物食べさせてしまい、真に申し訳ございませんでした」

後輩（多分）に敬語である。

「お詫びに、色々買いましたんで、どうぞ……」

ここに来る間に購買で色々買った。きっとお腹が好いているだろうと思って結構大量に買った。

と、嬉々はどういう反応をするかと恐る恐る伺って見ると。

「……わぁ」

目を爛々と輝かせて俺が買ったものに飛びついていった。まあ、喜んでもらえたなら何よりか。

「……君は」

と、俺が買ってたものがだいぶ少なくなってきたころ、嬉々は言う。

「君はとってもいい人だね」

その笑顔は、とても美しいと思った。

ってなことがあったんだ。まあ聞き流してくれても構わない。
しかしいまだ嬉々の質問には答えてないわけだから嬉々は首を傾げるばかりだ。

「まあそんなことよりさ」

俺は話題を変えようと強引に話をする。変える話題など存在しないのだが。

その時、俺の携帯電話が鳴る。少し助かった。少なくとも教室にもどるか話題を変えるかどちらかの働きをしてくれる電話だろう。つーか本当ならこの時間帯って授業始まってんだよな。一時間目。誰が電話寄越したんだ？

見れば、非通知設定だった。

「もしもし」

『やつほー、その声はもしかして二年十二組諏訪一理くんかい？
あつはーひっさしぶりだあ』

全く知らない声だった。

「誰だ？」

「誰かって？ 誰かって？ それは僕に聞いているのかな？ ひひひ、さあーて誰だろうねえ」

気持ち悪い。ただ単純にそう思った。

「そんなことよりどんなことより、もしかしてもしかすると君、つまりは私立不問不語学園中等部二年十二組出席番号三番諏訪一理君と言う人物の隣に変なちっこいホームレスみたいな人間はいないかな？」

「いない」

「そーかそーか。じゃあその子に変わってくれ。早く変わってくれないと君が初等部のころ下半身がトレーラーだったことをみんなにばらしちゃうよ？」

「そんな数奇な人生送ってねえよ！」

どんな状況だ！

しかしその電話の人物がかわれと五月蠅いので、嫌な予感はあるが嬉々に俺の携帯を渡す。って言うかコイツ、どこから見てるのか？

「……理外か……」

嬉々が落ち着いた声でそう言った。りがい？ だれだそれ？

「……………分かった」

そう言つと嬉々は俺に携帯を返しきた。あ、垢付いてる。

すると嬉々はどこかに行くのかくると俺と反対の方向を向いて歩き出してしまう。おいおい、俺のこと嫌いになったとか言うなよ。

「どこ行くんだ？」

「よーじ……一理には関係……ない」

言いながら嬉々は歩くスピードを上げる。もしかしたら走りたいのかも知れないが、嬉々の体力がそれを許さない。

うーん、しかしこれどうすっかなー。嬉々には関係ないとか言われたし、でも今から授業ってなかなかモチベーションが上がらないだろ。

……付いていこーっと。

俺は嬉々にばれないように後ろを付けていった。

明日葉藤の日記

僕の通う不問不語学園にはとにかく変な人が多い。

普通ならそれは嫌悪されることかもしれないけれど、僕はそうは思わない。

日常ならぬ非日常。とてもワクワクする。

そんな訳で僕が不問不語学園に入学したのは僕の確固たる意思だった。

ただ、この学園がそう言う人が沢山いることを知ったのが小学校のことだったので、僕がこの学園に来たのは中等部に入学する時からだ。故に、知人が少ない。

ただ、上記の通り僕は変人に関する興味だけは尽きなかったので、少ない情報網と知識を活かして変人やこの学園について調べ上げた。そうして一年かけて分かったことがいくつかある。

まずはクラス編成だ。

この学園には1組から12組まで存在する。“表面的には”。

まあその話は置いて、まずはクラス編成から見よう。それぞれ特色があつて分けられているのだ。まずは2, 3, 4, 5, 8, 9, 10組。コレは何でことない。ただの『その他』の集まり。普通の人。

そしてここからが重要。まずは1組。このクラスは『優秀な生徒』が集まっている。ただ単に成績メンのことじゃなくて、それよりも重要視されるのが思想面、行動面において優秀な生徒だ。例えば自分は何者かに襲われた場合、ここの生徒達は『相手を言葉で諭して

自分を救う』人種。まあ相手も自分も助けようって輩だね。全部が全部って訳じゃないけど統計的には。

次に7組。ここにいるのは『強い生徒』だ。つまり上記の場面に遭遇した場合、相手を追撃する。まあ強いと言っても単に体力面だけじゃないけど。例えば運が強かったり、精神面が強かったり、口喧嘩が強かったり。一組の生徒と違うところは相手を助ける気がないって所だね。

で、11組。ここは7組とは逆に『とにかく弱い生徒』の集まりだ。変人奇人に興味のある僕だけど、流石にこのクラスにはあまり興味がない。故にあんまり知らない。まあ自分が襲われるっていうシチュレーションになれば、間違いなく殺されるね。

それで12組と6組。12とその半分。

この二つの組は『何をするか分からない生徒』。つまり変人だ。例えばさつきみたいに誰かに襲われた場合は本当に十人十色。なにをしかすか分からない。何もしないかもしれないし、友達になるかもしれない、逆に誰かを襲うように仕向けるかもしれない。やっぱりこのクラス最高！。

因みに僕は一年の時は3組所属だったんだけど努力を重ねて今は12組生になったぜ。やった。まあ12組と6組を比べれば、変人割合が多いのは6組だったんだけど、まあこの一年も頑張って3年の時には6組になれるようにしよう。

「お前の話はどーでも良いんだよ。だからそのクラス編成に“例外”があるんだろ？ 早く聞かせろ」

「ああ、ごめんなさい」

と、ここで話に入ってきたのは我がクラスメイトあざりきたかせ亞桐北風君だ。

もちろん12組生なのでかなりの変人。髪が長く、片目を隠していて、首には首輪、両手は後ろに組んで手錠という一風変わった格好をしているのがこの北風君だ。

僕も一年の頃12組か6組、はたまた高望みして奇人会に入ろうと躍起になっていろいろしていたが、さすがの僕もここまで捨て身にはなれない。流石奇人会。

因みに今現在居る場所も結構変わっている。現在一時間目の最中なのだが、僕達はそれをブチって部室棟の一部屋にいた。

『第二サッカー部』それが現在居る部室の名前で、ここにいる亜桐北風君が所属する部活だ。

まあ所属するといっても部員は一人しか居ない。他のサッカー部員は第一サッカー部に居る。北風君が勝手に第二サッカー部を作ったから部員は一人だけなのだ。

練習は殆どしないらしい。一人しか居ないので当たり前だが。ただ稀に練習する時は中等部用は一つしかないサッカーグラウンドを貸しきってしまうので『雨が降っている』と同じ様な感覚で『亜桐北風が使っている』と言う理由で第一サッカー部は練習できない。そしてその部室だがかなり立派。ソファアやらベットやらテレビやらがあって僕の家よりも快適そうだ。

そろそろ戻ろう。

「えっとですね」

因みに同級生なのに北風君に敬語なのは変人度^{ランク}が上だから。

「この学園に存在する存在を殆ど知られていないクラス。その数、およそ20」

「多いな」

「そうですね。まだまだあるかも知れませんが。まあ初等部から高等部までなんで妥当じゃないかと。なんせ“一クラスに一人しかないんですから”」

ここで北風君の表情を見る。いつも不機嫌そうな顔かもつと不機嫌そうになっている。ふふふ、いい顔だ。

「今のところ名前まで分かっているのは少ないですけど、とりあえず中等部だけですと、1年楽家組。2年相馬組。3年関伽棚組。3年桜組」

「カツ、確かにどいつもこいつも有名どころばかりだな」

「まあこの中の誰もがありませんほどの影響力を持つ人たちばかりですからね。逆に学校側としては来て欲しくないぐらいでしょう。例えば今年中等部入学してきた楽家嬉々さん。彼……そういえば性別どっちでしょうね。まあいいですか。彼の初等部一年の頃のクラスは4組だったそうです。しかし入学初日、学校に登校してきたのはクラス40人中30人だったそうです。後から聞いてみれば、その休んだ人たちは事前に楽家さんとの接触があったとか」

「でも30人はいたんだな」

「ええ、まあしかし午前を過ぎる頃には半分が消え、帰る頃にはもう半分が体調不良を訴え帰宅しました。大方子どもの体では『楽家嬉々と言う存在が近くにいます』と言う現象に耐えられなかったのでしょうか」

「で、残りは一人か」

「いえ、二人です」

「ん？ 誰だ？」

「僕も詳しくは分かりませんが、たしか吉舎崎という苗字だったとか」

「はあ、吉舎崎ねえ」

北風君が思案する。あれ？ 奇人会の人間だと思ってたけど違わないのかな？

「奇人会にそう言う人はいないんですか？」

「ああ？ 本名なんて殆どしらねえよ。基本的にあだ名で……っておい」

あ、やべ。

「何でお前奇人会の存在知ってるんだ」

そういえば一応奇人会は『秘密の組織』だった。調べれば結構簡単に見つかるんだけどなあ。

「いやあ、だから僕、そう言う話が大好物でして」

「はあ、まあ良いけどな。しかしお前、恐れ多くも奇人会に入会したいなんて思っただろうな」

北風君が若干語調を強めて言った。

思ってますとも。来年こそは奇人会の入会、それが出来なくとも高等部で怪人会への入会は今僕の最重要事項ですよ。

とは言えない。

だって北風君は本物の奇人会の人間だし。

なんて誤魔化そう。と、考えていると先に北風君の方から喋り始めた。

「お前は無理だ。諦めろ」

いきなりそう言われた。結構ショック。

「俺達は“そうであるから”“そうなんだ”。お前みたいに“そうしようとして”いる時点でお前はもう変人でも奇人でもなんでもない。お前はただのいかれた一般人だ」

ばっさり。そう言い放った。
僕の一年間の努力は一体。

「実際努力とかよお、実力のない人間が天才に近づきたくてするもんだろ？ 生まれたときから“こう”であつた俺達には、途中から“そう”なろうとした奴の気持ちなんて全くさっぱりわからねえけどな。とにかくお前にゃ無理だ。せいぜい12組どまりだぜ」

そんな風に、見下すように。

冷徹に、北風君は言った。

「お前、俺にくつついて自分も俺の仲間になつた気で居るかも知れねえけどよ、思い上がるなよ？ 凡人。金魚のフンはどう足掻いたつて金魚じゃねえんだぞ？」

「……いや、僕は別に奇人会に入りたいとかそう言うわけじゃないです」

嘘だ。

「あつそ。俺はどっちでも良いけど。ただ気をつけるよ？ 変人おれたちと関わるつてのはそれなりにリスクがあるんだぞ？ お前は普通かも知れないが、普通の暮らしは出来なくなるかも知れねえ」

普通の暮らしが出来なくなる。

それは、望むところだ。

むしろありがたい。多少のリスクなんて知つたことか。この平々凡々な日常から抜け出すには確かに僕の力一人では無理かもしれないが、北風君のような人に“引っ張って”貰えば僕でもそつち側の世界を見ることがぐらい可能かも知れない。

「命が惜しけりや今すぐにここから消えな、ってことだな。まあ流石に命の危険まではないだろうけど、“俺達”の“俺達”はともお前らに理解できるような代物じゃあないからな。どんな目で見られるか分かったもんじゃねえぞ。さっきの話が本当なら12組になっちまったからもう手遅れかも知れないが、精々今年は目立たないように生きるんだな。」

俺も情報屋が居なくなるのはちつと痛いけどそれだけだ。特に感想もねえよ。そう言うわけで今すぐ後ろを向いてこの部室から出て行くことをお勧めするぜ」

「……嫌です」

小さいながらしはつきりと、僕はそれを断った。

「……人間は、願った物にしかなれず、願うことで一歩でもそれに近づく。……と、僕の小学校の頃の先生が言ってた気がします」

「そりゃ、職種とかの話だろ。俺が言ってるのは人種、種族の話だ。もともと生まれが違う俺達はどう頑張ってもお前達とは違う物なんだ」

「それでも……それでも僕は頑張りますよ。奇跡の突然変異を期待して」

「だから頑張る物じゃねーんだけど。……まあいいや。忠告はしてやったぞ。この先お前に何があったところで俺も奇人会も何も関知しねーからな」

「望むところです」

ここで一息ついたといわんばかりに北風君が黙りこくった。

と、その直後、それを見計らったようなタイミングで携帯の着信音。僕のじゃないから北風君のだろう。

「俺のポケットから携帯取ってくんね？」

ああ、そういえば両腕拘束されてたんだっただ。不便極まりない。僕は丁重に北風君の携帯電話を取り出すと通話ボタンを押し、北風君にそれを手渡す。北風君は足で受け取る。器用だな、おい。

「ん、なんだ？」

と、会話。北風君は『おう』しか言わないので会話が全くつかめない。

「分かった。今すぐ行く」

と、どうやら終わったらしい。携帯をその辺に放り投げてどこかへいく為に靴を履く。

「ちょっと行ってくる。俺がいねー間教室にでも戻ってる」

どこへ行くとも言わず、北風君は走り出してしまった。

………ついでにーっと。

生徒会との件

「本日をもって三十六奇人会は解散する！」

おいおい。

生徒会のそんな発言が飛び出したのは、まだ一時間目も始まっていない朝の時間だった。

「……………で、こんな朝っぱらから僕を呼び出したのはちゃんと理由があるんだろうな」

そう言うわけでご察しの通り逆夢蹴人はまだ授業も始まっていない7時を少し過ぎたぐらいの時間から、なぜかしらここ第四倉庫に召集されていた。

「んー、ぼくも知らない」

それに答える永久機関の答えはひどく短く、そして理由も結局分からない内容だった。

しかし顔だけは無駄に清々しい。もし仮に今ここに女性が10人いれば、そのうち8人はその笑顔に魅了されてしまうだろう。

「ああ？ お前が呼び出したんだろうが」

因みに言うが一応永久機関は2つ年上の上級生である。

「いやーぼくも昨日理外から聞いただけでさー。何がなんなのかさっぱり。だから理外に聞いて？」

と、目を倉庫の隅でなにやら作業をしていた男子生徒。つまりは理外に向けて永久機関は言った。

理外——花火は直接会うのは初めての相手である。普段ならどのような相手でも臆することの無い花火は、しかし彼の異様な雰囲気飲まれそうになった。

「えーと、あれ、理外って名前なのか？」

「うん。まあ勿論本名じゃないけどね」

「おいコラ理外！」

因みに理外も永久機関と同年。中学三年生である。

しかし先ほどとは違い花火の声はやや高ぶっている。ほんのり緊張が目に見える。永久機関はそのことに気付いていながらそれを微笑ましく見守っていた。

「んー？ 誰だお前」

理外は手に持っている知恵の輪を離さないまま言う。

「一年の花火だ。よろしく」

「ああ、君がそうか。僕が3年の理外だよーん。よろしくね」

「で、だ。僕をここに呼び出した用件を話してもらおうか」

花火が言っていると理外は持っていた知恵の輪を放り投げて（解き終わったらしい。二つに分解されている）花火に向き合った。そして神

妙な面持ちでこう言った。

「僕も知らない」

「何でだよ！」

「いやいや、僕も人から話を聞いたただだからねえ」

と言うことは又聞きであろうか。

「つていつかなんであんたにも話さなかったんだ。僕をここに連れてくる意味を」

「うーん、彼女だって正確に知ってたわけじゃないだろうからねえ」
「はあ!？」

花火は意味が分からず叫んでしまった。しかしそれもやむなし、花火はここまでの会話で何一つ正確な情報を手に入れていないのだ。

「彼女、怪人会の人なだけどさ、超能力者なんだよ」

理外はそんな出だしで会話を始めた。

「といつても最速ちゃんみたいなカッコいい能力とかじゃなくて、透視とか千里眼とか未来予知とかそういった類の能力。まあ本人は目え見えないんだけど。」

で、その彼女から今日奇人会にお達しがあったわけ。なんだっけ……、『第四倉庫に出来る限りの戦力を整え待機せよ』だっけ？

だから君が呼び出されたわけ。お分かり？

「未来予知て……お前らそんなもの信じるのか？」

「ははは。あつたりまえだねえ。予知を信じないと仮定するなら僕は最速ちゃんも信じないし」

「まあそれもそうか。……じゃあ何だこれ。全然戦力揃ってる気がしねえぞ」

現在第四倉庫にいる人物は花火、理外、人形、永久機関、それに門番の将棋と囲碁だけである。花火、囲碁将棋、まあぎりぎり理外も含めるとして、後は全く役に立ちそうも無い面子である。そもそも人数自体少ない。たしか36人居る筈であろうに。

「朝早いからねー。まあ何とかなるでしょ、あいつさえいれば」

理外が首で永久機関を示す。そんな花火の心情を察したように理外が言う。

花火が心の中で戦力外とした、永久機関を。

「まあやる気になるかどうかは別だけどね」

（そういえば永久機関って何の力を買われてここにいるんだ？）

花火はそう思うが口に出すことは出来なかった。

なぜなら花火がそう言おうと口を開いたとき、第四倉庫の外で人が倒れる音がしたからだ。

「なんだ!？」

単純に考えれば囲碁将棋が誰かを叩きのめしたか、或いはその逆。

「門番って言っても強ええ訳じゃねえんだなあ。10秒掛かんかったぞ」

囲碁将棋が叩きのめされた。

倉庫の扉を乱暴に開けて入ってきたのは三人。いずれも花火は見
たことのある人だった。

知り合いと言うわけではない。花火達が一方的に知っている人物。
生徒会役員だ。

最初に入ってきた少年、学年は花火達と同じ1年生であるが体格
は13歳にしては良い。筋肉が付くところに付いているといった感
じである。髪は逆立っていて、目も釣りあがっている。一目で好戦
的な人間だと分かる人間だった。無論、先ほどの発言をし、恐らく
は囲碁将棋を叩きのめした張本人であろう。

「俺は生徒会副会長、佐上銃之助さがみじゅうのすけつす。知ってるよな」

続いては二人同時に入ってきた。向かって右側の女性、どうやら
2年生のようだ。女性にしては高身長で髪は長い三つ編み、眼鏡を
かけている。一見ただの文学少女のようだが、どうやら本当にただ
の文学少女のようだ。先ほどから文庫本を片手に持っていて、目を
離さない。どうやら自己紹介をする気さえ無いらしい。

変わりに佐上銃之助が代弁する。

「……こっちは先輩の菅原愛子さんつす。生徒会副会長つす」

最後は大きな三年生の男性だった。大きな、といっても170の
中盤だが。彼は七三分けに眼鏡と明らかに優等生の顔のつくりでは
あったが、両腕に持ち、腰にいくつも帯びている竹刀がそのイメー
ジを完全に壊していた。明らかに危ない人である。

「苗木錬なえぎれん。生徒会副会長だ」

「あれ？　なんで副会長が三人もいるんだ？」

ここで口を挟んだのは花火である。空気を読まないことこの上ないが、ここはそういった連中の集まりなので勘弁して欲しい。

「ウチの生徒会のシステムは少し変わっていてな。まず生徒会長を選挙で決めてからその会長が15名以内で好きに副会長を選んでも良いという方式を取っている。勿論こちらにも拒否権はあるが。そして生徒会長と副会長以外の役員はいないんだ。というか入学時に話されなかったのか？」

やや呆れ気味で苗木錬が言う。

「いやあ、話されなかったなあ」
「いや、話されたっす」

即座に佐上銃之助の訂正が入る。

「であろうな。まあ良い。我々はそんな話をしに来たのではない。
——おい」

明らかに永久機関のことを見らみつけながら言う。

「貴様がこのいかれた組織のトップだったな」
「うーん、まあ一応そうだよ」
「では今すぐこの組織に属している全ての人間に告げるかい」

ここで苗木錬は一拍置く。そして先ほどよりやや大きめの声で言う。

「本日をもって三十六奇人会は解散する！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3270q/>

私立不問不語学園中等部、36人の変人、奇人、怪人達

2011年12月7日02時53分発行